

堂本彰夫の古代史旅枕

Part 1

(「『岳陽』と共に」連載記事①～⑤⑩)

堂 本 彰 夫

2025 年 4 月

目 次

- ① 「老松^{おいまつ}」に隠された北部九州の秘密
- ② 改めて、「老松」とは？
- ③ 隠されている？「木（紀^き姫^き）氏」の存在?!
- ④ もう一つの頭痛の種?!「鴨氏（族）」も熊襲なのか？
- ⑤ 改めて、「熊襲」／「紀・姫氏」とは？

- ⑥ 「開化」と「崇神」に託された（隠された?）、古代氏族の攻防?!
- ⑦ 何故、二人の関係説明が「突破口？」となるのか?!
- ⑧ 新たな「旅枕」？「宮地嶽神社」の謎は見えるか?!
- ⑨ 残念ながら、「宮地嶽神社」の謎は追えなかったが…?!
- ⑩ 開化天皇、高良大神、武内宿禰、住吉大神、神功皇后の絡み？そこが解明されれば、一気に謎は解ける?!

- ⑪ 「倭国大乱」に端を発する、我が国の形（倭国→日本）?!
- ⑫ 逆転の発想？が必要！「記紀」編纂の舞台裏?!
- ⑬ 似非「旅枕」？しかし、ここでは、是非書いておきたい?!
- ⑭ 「倭国大乱」は、「準備されたストーリー」に絶対組み込まれている?!
- ⑮ 「倭国大乱」と、そこにおける「大幡主」の謎（怪?）?!

- ⑯ もう一つの謎（怪?）?!欠史八代最後の、第9代「開化天皇」！
- ⑰ 改めて、倭国大乱と「大幡主命（大若子命／武埴安彦）」／「開化天皇」の関わりは?!
- ⑱ 「大幡主命」が「旧倭国」、「開化天皇」が「新倭国」?!
- ⑲ 「倭国大乱」は、「鰐族」と「鴨族」の移動（逃亡?）から?!
- ⑳ 「大幡主命」と「開化天皇」は、「新旧倭国勢力」（「二極体制」）の生みの親?!でも、何故か双方は隠されてもいる?!

- ㉑ 「記紀」は、九州における「新旧倭国勢力」の実体を知らせたくなかった?!
- ㉒ ひょっとしたら、「神武東征」は（も?）「合わせ鏡」?!
- ㉓『古事記』の方は、「饒速日^{にぎはやひ}命」（物部族）のそれ？
- ㉔ いよいよ次号からは、中南部九州との関係を探る?!

- ㉕ 古代日向国の実像を求めて－その1－怪しげな「皇宮神社」?!
- ㉖ 古代日向国の実像を求めて－その2－「日下部氏」とは?!
- ㉗ 古代日向国の実像を求めて－その3－「南部九州」にも目を向けよ！
- ㉘ 古代日向国の実像を求めて－その4－「耳^{みみ}」と「投馬国」?!
- ㉙ 古代日向国の実像を求めて－その5－「熊襲（球磨曾於）」の北上?!

- ③⑩ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１－「神功皇后」「武内宿禰」の謎?!
- ③⑪ 改めて、古代九州の全体像を探る－その２－北部と中南部の相剋の地・高良山?!
- ③⑫ 改めて、古代九州の全体像を探る－その３－謎の高良玉垂命?彼(女?)は一体誰??
- ③⑬ 改めて、古代九州の全体像を探る－その４－始まりは、ここ「大善寺玉垂宮」?!
- ③⑭ 改めて、古代九州の全体像を探る－その５－二つに分かれた、高良山周辺の勢力?!
-
- ③⑮ 改めて、古代九州の全体像を探る－その６－「祖禰」とは、武内宿禰らのこと?!
- ③⑯ 改めて、古代九州の全体像を探る－その７－701年までは続いていた「九州王朝」?!
- ③⑰ 改めて、古代九州の全体像を探る－その８－本当の真実・事績とは?
- ③⑱ 改めて、古代九州の全体像を探る－その９－鍵を握る「継体」と「磐井」の関係?
- ③⑲ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１０－継体王権は、精査が必要である!
-
- ④⑩ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１１－余りにも悍おぞまましい?「武烈天皇」?!
- ④⑪ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１２－「筑紫君磐井」は、「武烈」とされた?
- ④⑫ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１３－九州倭国に送られていた百済の皇子!
- ④⑬ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１４－筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋?
- ④⑭ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１５－「武烈」とは、誰のことか?
- ④⑮ 改めて、古代九州の全体像を探る－その１６－改めて、全体像を眺めてみると?!
-
- ④⑯ ここからは、九州での隠れた事績を追う－その１－「日本貴国」はどうなるのか?
- ④⑰ ここからは、九州での隠れた事績を追う－その２－高良大社(高良山)と阿蘇の関係?!
- ④⑱ ここからは、九州での隠れた事績を追う－その３－隠された神?高良玉垂神の謎?!
- ④⑲ ここからは、九州での隠れた事績を追う－その４－改めて「多氏」はどう絡むのか?
- ⑤① ここからは、九州での隠れた事績を追う－その５－鍵を握る「阿蘇」「健磐龍命」!

※この「堂本彰夫の古代史旅枕」Part 1は、別途作成している新通信『岳陽と共に』の「特別コーナー～堂本彰夫の古代史旅枕～」の①～⑤に、「補遺」を加えて、必要な加除修正を行ったものです。ちなみに、「補遺」は、少々暴走(妄想?)過ぎる部分もあるように思えますが、寛大な受け止め方で、ご笑読?いただければと思います。なお、この論考は、これからも、上記『岳陽と共に』にて続けていきますので、下記ホームページ上にて、変わらぬご笑読?いただければ幸いです

(令和7年4月)

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

①「老松^{おいまつ}」に隠された北部九州の秘密

やはり最後は、古代史探訪である！私堂本にとっては、それは、単なる歴史好きということではなく、自国の成り立ち時の不明さ（嘘？）とその原因、そして、改めての真実を、自分（達）なりに知っておきたい！それが、この国に生を受けた一人の人間（国民）としての責務なのではないか（嘘？をつかれているのが悔しいとも？言い過ぎか？）、そう思うからである！

だが、そうは言っても、所詮素人、そんな大それた所業など、土台無理な話である！専門の研究者はともかく、長い年月と労力をかけて、必死に追いかけてきた先人達に申し訳ない（ネット上には、そうした人達が山ほどいる！）！そんなことを思いながらの、我が古代史の旅でもあるわけであるが、とは言え、少しは見えてきたものもある？！

あるいは、これまでの多くの知見の整合化の道筋みたいなものも、いくつか見えてきたようにも思う？！要は、有益な情報や研究成果が多々あるにも拘わらず、それらは、一つにはまとまらず、同じ国の歴史なのに、誠に奇妙な状態（バラバラ？）となっているということである！

ということで、ここでは、「堂本彰夫の古代史旅枕」と題して、その辺りのことを、改めて記していこうと思うが、今回は、先の同期会に際して訪れた（それが、「旅枕」ということでもある?!）、福岡県朝倉市の「下^{した}~~あ~~^{ぶち}老松神社」をネタに、「老松」に隠された北部九州の秘密？について触れておきたい。

まず（これは、ネット情報からではあるが）、この下^{した}老松神社は、「秋月への入口点の甘木待丸・三輪内村と秋月街の中間に当たり、楠の大木が繁る境内の広い神社」であるが、福岡県神社誌によれば、祭神は、「神功皇后」と「菅原神、吉祥女」とされているということである。

しかし、社殿には「梅鉢紋」（「菅原神」を表す）が打たれてはいるが、実際は、「菅原神、吉祥女」は祀られていないし、神功皇后も、本殿後ろの摂社群の中の「忌宮^{いみのみ}のみや^や神社」に関連はあるが、本殿には祀られていない！したがって、実際の神社祭神が異なっているというのである？！

もちろん、この異変？については、どういうことか、私にはよく分からないのであるが、この「老松神社」は、通常（表面的に）は、菅原道真とその親族を祀るとされているが、実は「開化天皇（第9代）」（あるいは「大国主命」？）を隠し祀る神社なのではないか（天満／天神神＝菅原神の名の下、開化天皇が消されている？隠されている？）?!そういうことが言われているのである?!福岡県内には、そのような老松神社が11社（実際は64？社）あるらしいが、そこには、大変な秘密が隠されている?!ならば、どんな秘密が？そして、そうであれば、何故そうなっているかなのである？！

※補遺 「老松」こと？第9代「開化」と近畿に現れた第10代「崇神」の関係が気になる？一応親子関係であるが、そこには、どういう事情があるのか？「開化」が北部九州にいて、「老松」として祀られていることは確かなようである？！

②改めて、「老松」とは？

先に、福岡県に数多く存在する「老松神社」は、かの菅原道真とその眷属を祀る神社とされているが、本当は、「開化天皇（第9代／欠史八代の最後、あるいは「大国主命」？）を隠し祀る神社ではないか（天満神／天神様の名の下、開化天皇が消されている？隠されている？）ということであつたが、改めて、それはどういうことか？そして、何故、そうなっているのかである?!その続きを記そう。

要は、例えば「太宰府天満宮」は、「道真」と縁の深い神社であるが、そこには前史があり、元来は九州倭（わ／いい or ゐ）国政権直属の神社であり、始原の神とされた「天御中主（北極星?）」ら、天神^{あまつかみ}（海人^{あま}／海神^{わたつみ}族）を祭っていたのではないかということである?!すなわち、道真を排斥した藤原氏が、度重なる災害を道真の怨霊のせいだと宣伝したのと（→北野天満宮の創始）、それに合わせて、何とかして九州倭国政権の残滓を消し去ろうとした政権が、都合の良い「祭神の入れ替え」を行ったのではないかということである?!

そんな「祭神の入れ替え」というような大それたことがあつたのだとは、現代の我々からすれば、とても信じられないことなのだが、どうも、そういうことは、しばしば行われてきたようなのである（その最大のものが、かの伊勢神宮／内宮の祭神である?）?!ちなみに、菅原（菅公）家は、血統的には、例の「出雲の国譲り」において「先遣隊」の役割を担ったとされる「天穗日^{あめのほひ}命」（出雲大社宮司・出雲臣氏→千家家の祖神）を祖とし（土師氏も?）、一方でまた、「倭奴（那）国」の王（AD57年に後漢から金印を貰った?）であつたとされる「大幡主（武埴安彦・鰐族?／櫛田神社の主神）」の一統ともされるのである?!そして、前者は、いわゆる「尾張氏」の一派ともされている?!

出雲と北部九州、そして、大和や丹波／伊勢／尾張や近江（もちろん紀伊、吉備も!）の関係については、今後改めて整理していかなければならないが、大きな枠組みとしては、出雲と北部九州の関係が、まずは大きく横たわっている?!そして、その出雲と北部九州の関係が、かの「老松神社」に被せられている?!それが、「開化天皇（or 大国主命?）」の頃の状況であり、当時（4世紀頃?）の九州倭国政権の実体であつた?!

具体的には、2世紀末の「倭国大乱」、それに伴う「奴（那）国」勢力（王族?）の衰退・各地への飛散?、伊都国と邪馬台国（使用字や読み方には異同もあるが!）による「新?倭国（邪馬台国連合→親魏倭王「卑弥呼」）」の登場、その後の「台与」（これも、使用字や読み方には異同もあるが!）への継承、そして、それ以降、歴史の闇?に消えていった「新?倭国」（空白の4世紀）?!しかも、そこには、「紀（木←姫）氏」「熊襲（球磨曾於）族」の関わりがある?!実は、その辺りのことが、この「老松神社」から見えてくるのではないかということであるが、今後は、その「闇?」に関わる、神功皇后／武内宿禰／応神天皇等に仮託されている史実?を、いかに解明していくかである?!そして、そこでは、当然、朝鮮半島との関係も視野に入ってくる?!

※補遺 改めて、「開化」前後の「倭国」は、どういう状況にあつたのか?彼は、その後の「二極化」の基点となった存在?あるいは、その象徴?と考えられるが、果たしてそれは、どういう勢力の人物（仮構モデル?）であつたのか?

③隠されている？「木（紀←姫_き）氏」の存在?!

さて、改めて、その「老松」であるが、実は、「松」は、「木」偏に「公」！すなわち「木の公_きのきみ」と読める?!だから、木（紀←姫_き）氏を示す（しかも「老」？が被さっている?）?!その指摘を見た時は、最初は偶然、否、言葉遊びかとも思ったが、ひょっとしたら、それもあり得る?そう思ったわけである（没落しかけている「木の公」?）!と言うのも、木／紀（伊）氏は、もちろん現在の和歌山県を本拠地?とした古代豪族ではあるが、その出発地（直前のそれ?）は、北西部九州の「基肆_{きい}」地方と考えられ、かの「貴国」（百濟紀にある!）は、そこにあった?!ちなみに、その貴国は、半島諸国には、当初知られておらず（途中から出現していた?）、新たな国（勢力）であった（そう考えれば、さらに辻褄が合うのである?）?!

しかるに、その「木／紀氏」であるが、問題は、それ以前はどこにいたのか?そして、本来の、その出自は?その解明が、新たな頭痛の種ともなってくるのである?!何故なら、その「木／紀氏」は、そもそも「武内宿禰系」諸族（半島系渡来氏族／伽耶・新羅系?）の一つと考えられるからである（後の半島南端部の前方後円墳の存在は、その証左?）?!ところが、最近知った情報（新説?）によれば、彼らは、中国江南にあった「呉国（句呉）」（三国時代の「呉」ではない!）の王族の末裔で、B C 5世紀頃に九州中部（肥後菊池郡山門）に漂着していた「姫_き氏」であるというのである。

そして、その後、彼らは、同じ江南出身の、いわゆる「熊襲（球磨曾於）族」と合体して、中南部九州から攻め上がり、北部九州までもを席卷していた（地下式横穴墓や装飾古墳の分布?）?!そして、その子孫が、2世紀末の「邪馬壹（台）国女王卑弥呼」や5世紀の「倭の五王」（讃・珍・済・興・武）達であった?!そしてまた、かの武内宿禰は、その「熊襲族」の棟梁（弥五郎どん?）でもあったというのである?!

実際、紀（木／姫）氏と熊襲族は、ある時期合体したとみえ、途中から、『紀』に記す「厚鹿文_{あつかや}」「辻鹿文_{さかや}」など、熊襲族の首長とされる名が連ねられているという（「姫氏・松野連氏系図」より）。しかもまた、その紀（木／姫）氏が移動・進出していた?北西部九州には、鴨氏（これも熊襲族?先の菊池市には、加茂川や賀茂神社がある!）、日下部_{くさかべ}氏や内_{うち}氏（武内宿禰の直系?）、海人／天_{あま}族の久米氏らが進出していたことをうかがわせる地名や川の名も数多くあるという（しかも、隼人もいる!）?!果たして、これらが、記紀に言う「熊襲」なのであろうか??あまりにも複雑である?!

ということで、通説では、熊襲とか隼人とかという中南部九州の部族・勢力は、いわゆる蛮族（隼人の場合は、若干扱いが違う!→「ホデリ／ホスセリ命（海幸彦）」）とされ、大和朝廷や九州王朝とは、一線を画すものと思われていたのであるが、このように、紀（木／姫）氏と同化、そして、その紀（木／姫）氏が、「倭の五王」や武内宿禰とも関係がある?!であれば、これまでの認識を大幅に変えなければいけなくなるのである?!ただし、実は、頭痛の種は、これだけではないのである!

※補遺「木／紀氏」と「貴国」、「木／紀氏」と「熊襲（球磨曾於）」の関係は?彼らは、ある時期北部九州から近畿の方に拠点を移している（→富雄丸山古墳?）!実は、この辺りのことが、記紀では、ほとんど暁されている（空白の4世紀）?

④もう一つの頭痛の種?!「鴨氏(族)」も熊襲なのか?

前号で、頭痛の種がもう一つある(出てきた?)と書いたが、実は、それは、「鴨(賀茂/加茂)氏」のことである!彼らは、記紀で言う大和建国(3世紀後半?)に、直接関わっているということは分かっているが(神武一行を、無事に大和に先導した八咫鳥^{やたがらす}こと「建角身^{たけつぬみ}の命」は、鴨族の統領とされる!)、その「鴨(賀茂/加茂)氏」は、大和(葛城)はもちろんであるが、吉備、出雲、筑紫をはじめ、全国至るところに、その名を見せているのである!

そして、かの京都には、その「鴨(賀茂/加茂)氏」が関わる「下鴨神社」「上賀茂神社」もある!前者は、「加茂御祖^{みおや}神社」とも呼ばれ、建角身命が、娘「玉依姫」と一緒に祭神となっている神社であるが、その「建角身命」は、何と、襲(曾於)の国の出身であるとして書いてあるものもあるのである(「山城国風土記」〈逸文〉)。ちなみに、後者は、「玉依姫」の子「加茂別雷^{わけいかづち}神」が祭神とされている(これは、「秦氏」との関係による?)!

いずれにしても、このように、「鴨(賀茂/加茂)氏」の存在は、重要ではあるが、その解明には、果てしない混迷が待ち受けているのである?!したがって、もしそうであれば、かの、神武による東征(大和建国)それ自体が、「熊襲」によるものともなるのである?!しかるに、私は、その「鴨(賀茂/加茂)氏」の「建角身命(八咫鳥)」自体が、「神武」のモデル(ダミー?)なのではないかと密かに思っていたのであるが、彼らが、改めて、その「熊襲」だということになれば、「記紀」の解釈は、かなり根底から見つめ直されなければならない?!

ということで、改めて、「木(紀^き姫^き)氏」や「鴨(賀茂/加茂)氏」、一体彼らは、何者なのだ??そして、一方の「木(紀^き姫^き)氏」が九州王朝に関わり、そして他方の「鴨(賀茂/加茂)氏」が、大和建国に関わっている?!「熊襲」?!私の頭の中は、こんがらがらるばかりなのである?!

なお、その、「鴨(賀茂/加茂)氏」が関わる?「神武東征」であるが、その痕跡は、実は、大和・葛城に大いに残されている!いわゆる葛城山麓(現在の御所市周辺)の地名や神社名がそうである(高鴨・葛木御歳・鴨都波神社等。阿治須岐高日子根命/迦毛之大御神→鴨族・葛城/一言主勢力?間違いなく、この地域は、一方の三輪山山麓の諸族/三輪・大神^{おおみわ}氏→大物主/崇神勢力?と共に、大和建国に関わっている?!)。また、吉備の加茂地区(例の「楯築^{たてつき}遺跡」の近く!)には、前方後方墳/手焙形土器(火の祭祀用?)勢力の出発地と目される「加茂西遺跡」(原初期の手焙形土器がそこで発見されている!)がある(藤井耕一郎『タケミカヅチの正体』河出書房新社)!であれば、「吉備」を経由したという「神武一行」は、その「鴨(賀茂/加茂)氏」そのものではないのか?!興味(疑問の連鎖)は尽きないが、これから先は、また次号にて!

※補遺「鴨族」は、南部九州から吉備、そして出雲経由で近畿へ行ったのか?それとも、出雲族(事代主系)自体か?だとしても、彼らと「宗像系」の関係は?いずれにしても、彼らが、大和王権の樹立に関わっていることは間違いない?!

⑤改めて、「熊襲」／「紀・姫氏」とは？

さてさて、その怪しげな「熊襲」に関わっては、先に紹介したように、「姫氏・松野連系図」というものがあって、そこには、件の「紀・姫氏」はもちろんであるが、何とあの邪馬台国の卑弥呼や台与、そして、「熊襲」（川上梶帥^{たける}／取石鹿文^{かや}等）、さらには、その後の「倭の五王」（讃・珍・済・興・武）等まで続いているという！

ちなみに、同系図は、江戸末期から明治期にかけての系譜研究家（国学者）である「鈴木真年^{まとし}」という人が、各地の氏族系譜史料を収集し、それらを、メモ風に考査・修録したもの（『諸系譜』）の一つであるということである（『中興系図』？：国立国会図書館と静嘉堂文庫に所蔵とある）。だから、まったく出鱈目な、いわゆる「偽書」ではないということでもある？！

それはともかく、それによると、件の「松野連氏」は「呉王夫差」の後裔で（このことは、平安期の『新撰姓氏録』にも書いてあるということである！）、「呉王夫差の子・忌」が日本に渡って帰化人となり、筑紫国に至って、肥後国菊池郡に住み、さらにその子孫・松野連が、筑紫国夜須郡松野に住して、姫姓から松野姓に変えたのが始まりとされているらしい。そして、北部九州には、同氏を祖とする氏族の家系が、複数存在するということなのである？！

ということは、この「松野連氏」が、まさに「姫→木／紀氏」（の本流？）であり、現在追及中？の「老松」（三階松？）、すなわち「木の公^きのきみ」であったのではないか？！しかも、繰り返すように、この老松神社は、いわゆる欠史八代の最後「開化天皇（第九代）」を主祭神とする、謎？の神社（群）ともされる？！そして、次の第10代が、新たな（真の？）「ハツクニシラススメラミコト」とされる「崇神天皇」なのである！したがって、ここに何かが隠されている？！

また、それに関わっては、当然？第8代の「孝元天皇」も、その謎に与している？！すなわち、開化天皇は、孝元天皇の第二皇子で（母は、皇后で、薨色雄／内色許男^{うっしこめ}命：穗積臣遠祖（※穂積臣氏は「物部氏」と同祖）の妹の薨色謎／内色許売^{うっしこめ}命）、同母兄弟には、大彦命・少彦男心命・倭迹迹（日百襲？）姫命、異母兄弟には、彦太忍信命・武埴安彦命（大幡主命／大若子命？）がいる！

さらに、その孝元天皇は、孝霊天皇（第7代）の皇子（母は、皇后で、磯城県主または十市県主大目の娘）で、同母兄弟はいないが、異母兄弟に、倭迹迹日百襲姫命・彦五十狭芹彦命（吉備津彦命）・稚武彦命ら。穂積臣氏の祖の薨色雄命の妹の薨色謎命を皇后として、大彦命・稚日本根子彦大日日尊（後の開化天皇）らを得た。また伊香色謎命、埴安媛を妃にし、伊香色謎命との間には、葛城氏・蘇我氏等の祖彦太忍信命を得た。埴安媛との間には、御間城天皇（崇神天皇）の代に反乱を起こすことになる武埴安彦命を得た。とんでもないことになった！この続きは次号で

※補遺 この「松野連氏」が「姫→木／紀氏」（の本流？）であれば、通説は激変する？ただし、松野連系は、北部九州（高良山周辺）に留まっていた→倭の五王？だが、彼らは、最後には、豊国倭国（→大和王権）によって衰亡させられる？

⑥「開化」と「崇神」に託された（隠された?）、古代氏族の攻防?!

さて、先号では、件の「老松（神社）」（三階松?）が、「姫→木／紀氏」（の本流?）の「松野連氏」（「木の公きののきみ」）のものであり、そして、そこに、いわゆる欠史八代の最後とされる「開化天皇（第9代）」が関わっていることを示そうとしたが、結論としては、次の第10代が、新たな（真の?）「ハツクニシラスメラミコト」とされる「崇神天皇」であるわけであるので、そこにある関係（ある意味では断絶?）を、改めて精査する必要があるということを示そうとしているということである?!

ということで、まずは、彼ら（「開化」と「崇神」）が、どのような系譜でつながっているのかをみたかったのであるが、少なくとも、それは、第8代の「孝元天皇」、そして、第7代の「孝霊天皇」までは遡る必要があると思つてのことであつた（ただし、本当は、第5代の「孝昭天皇」までも?何故なら、彼は、いわゆる「和珥（鰐）族」の祖?ひょっとしたら「大幡主命」<武埴安彦命／大若子命：櫛田神社の祭神として描かれている!>かもしれない?）?!

いずれにしても、そこには、多くの古代氏族が関わっているということであるが（「記紀」による創作・改竄も、当然あつたとは思われるが?）、そこで、注目されるのが、先号で示したように、「開化天皇」は、かの「物部氏（穂積臣氏）」と関係があつたこと、そしてそこに、大彦命・少彦男心命・倭迹迹姫命（同母兄弟）、さらには彦太忍信命・武埴安彦命（異母兄弟）等が絡んでいるということであつた!

すなわち、孝霊天皇の子である、その父親孝元天皇は、母系で、大和とつながり、一方でまた、吉備との関係（異母兄弟）がある?!しかも、彼は、穂積臣氏（物部氏）の祖の薨色雄命の妹の「薨色謎命」を皇后として、大彦命・稚日本根子彦大日日尊（後の開化天皇）らを得ている。また、「伊香色謎命」、「埴安媛」等を妃にし、前者との間には、葛城氏・蘇我氏等の祖となる「彦太忍信命」、後者との間には、「御間城天皇」（崇神天皇）の代に反乱を起こすことになる「武埴安彦命」（「大幡主／大若子命」?）を得ているということである。

そこで、改めて、いわゆる「欠史8代」であるが、実は、そこには重大な秘密（実際の権力争いの構図?）が埋め込まれており、特に、最後の第9代「開化天皇」に関わつては、まさに、福岡県の高良山周辺（ある時期の筑紫倭国の中心?）での権力争いの状況が伏されている?そして、それは、「姫→木／紀氏」（→「松野連氏」／「木の公きののきみ」）と、そこから生まれた（離脱していった?）「崇神」勢力（物部氏?）の関係を示すものではないか?!

※補遺 「高良山周辺」で何があつたのか?そこでの諸族の集散離合（北から南からの）が、後の「倭国→日本」の実体（二朝並立化?）につながっている?!→隈氏 三沼氏 阿蘇氏 日下部氏 火（肥）君氏／熊襲（球磨曾於） 武内宿禰諸族 伽耶・新羅系諸族／神功皇后（息長氏） 住吉大神 応神 「藤／藤?」（百濟宗家佛流系余氏）→「倭の五王」→とにかく、この周辺での状況が、後の二朝並立（筑紫／九州王朝と豊国／近畿王朝）につながっていることは間違いない?!

⑦何故、二人の関係説明が「突破口？」となるのか?!

ということで、もし、そうだとすれば、そのことが、その後の九州と近畿（大和）の状況（二極化の構図?）を形づくっていったということになる（ただし、「記紀」は、後者の「崇神」勢力（物部氏?）からの歴史叙述であることは、言うまでもない?）?!しかしながら、まだまだ、私が言わんとすることは明瞭ではない（ある意味、当然ではあるが!）?!つまり、史実?としての当時の状況、氏族の関係が、具体的に描かれていないということである?!とは言え、その具体化の突破口?が、「開化天皇」と「崇神天皇」の関係説明にあることは、かなりの感触をもって言えるのではないか?!今後は、そこに基軸をおいて進むだけ?!

そこで、改めて、何故、「開化天皇」と「崇神天皇」の関係説明が、その「突破口？」となるのかであるが、一つは、当時（8世紀前後）の、『日本書紀』編纂の主体（持統／藤原政権）が、第10代の「崇神」を、「大和王権」（「近畿倭国→日本国」）の、事実上の初代王（ハツクニシラススメラミコト）としていることであるが、彼が、北部九州から（それ以前は韓半島?伽耶?）、おそらく吉備を経由して?、大和に入ったことは間違いないからである（纏向／三輪王朝?）?!ちなみに、創作上?の初代王「神武」（こちら、ハツクニシラススメラミコト）は、「記紀」全体の内容構成の必要（そもそも、我が国の紀元／起源を、識緯しんい思想を用いて、可能な限り古く見せるために、BC660年としたことによる!）から考え出されたことは、これもまた、ほぼ間違いない?!

ただし、そのモデル（ダミー?）は、当然?いたのであり、それが、3世紀初期の、まさに鴨（加茂・賀茂）族の統領?「建角身命」（八咫鳥）であった?!とは言え、そこには、大きな穴（問題?）が生じた!つまり、史実?を800年余り遡らせたので、その期間を、どのように埋めていくのかということである?!

そこで、これからは、私自身のオリジナル（空想?）かもしれないが、そこに、いわゆる「欠史八代」が考案され、その空白を補おうとした?!しかも、そこに、ある意味では史実であることを、いわゆる「神話」という形（時間軸?）で、婉曲に投影させた?!とりわけ、伊弉諾／伊弉冉による「国生み／神生み」、そして「別離」、その後の、伊弉諾による「三貴子（天照大神／月読命／素戔鳴命）」生誕、そして、天照大神と素戔鳴命による「誓約^{うけい}」、その後の「天岩戸事件、素戔鳴命の出雲追放・八岐大蛇退治」等、さらには、素戔鳴命の子?の大国主命による「国づくり、国譲り」等々。

そして、最後の、天照大神の孫の「瓊瓊杵尊」による「天孫降臨」、さらには、「日向三代（瓊瓊杵尊／彦火火出見命／鵜葺草葺不合命）」の物語と続いていくわけであるが、実は、それらは、単なる神話（作り話）ではなく、持統・藤原政権が把握していた、ある意味では、大和建国あるいは政権獲得までの史実であり、それらをデフォルメ化したものだったということである（だから、欠史八代の事績自体は、少ないのでもある?それでよかったのである!）?!

※補遺 「記紀」のからくり→二人の始祖王→それは何故?そして、「三貴子」（天照大神・太陽／月読尊・月／素戔鳴命・海原）の創出は、何を示すのか?→王権を作り出した三つの系統（天孫・天津神系と出雲・国津神系）の絡みを暗示か?

⑧新たな「旅枕」？「宮地嶽神社」の謎は見えるか?!

さて、「旅枕」と称しながら、そうした風情は一向になく、少々焦っていたところであるが、近々、その「旅？」が実現しそうである！ここでは、その「旅？」自体については触れないが（後日？別途、紹介することにはなるであろう？）、実は、このコーナーの主テーマ（「老松（神社）」を追う！）と、おそらく大に関わってくるであろう？、福岡県の「宮地嶽神社（及び境内の横穴式石室）」を訪ねることになった！たまたま当地に寄る機会ができて、ちょうどその時（今月28日）、年3回あるという、同神社の古墳の開陳という僥倖？に与えることになった！

しかるに、「宮地嶽神社」は、福岡県内でも有数の神社であり（年に2度、境内石段から玄界灘まで真っすぐ伸びる参道の延長線上に夕日が沈む「光の道」で有名！）、主祭神が「神功皇后」で、「陪従神」として「勝村大明神」と「勝頼大明神」（あまり知られていない？）が配祀されているという（三神を称して、「宮地嶽三柱大神 みはしらおおかみ」と呼ぶらしい！）。

詳しいことは、ここでは書けないが、ここで、私が注目したいのは、主祭神の「神功皇后」はともかくとして（本筋としては、最重要人物？）、「陪従神」とされる「勝村大明神」と「勝頼大明神」という、耳慣れない（不思議な？）二人の神のことである！別説によれば、「安（阿）部丞相（じょうしょう）（宮地嶽大明神）」「藤（とう）高麿（勝村大明神）」「藤（とう）助麿（勝頼大明神）」、あるいは「宗像三女神」と「勝村大明神」を祀るとも言われているらしい?!

深入りすれば、何とも恐ろしい？神社のような気もするが、ここで、改めて気になるのは、「藤（とう）」という名の人物（神）である！現在（代）も、まさに「藤（とう）さん」という人が、福岡県にいたが（知人にいた！）、この「藤（とう）」氏？の末裔なのではないかとも思ったりもする?!ということで、このまま「宮地嶽神社」を深掘りしていくと、これまでの、「老松（神社）」への言及が、さらに遠ざかる恐れもあるが、実は、この神社と、近場の、かの「宗像大社」とは因縁深き関係にあり（前者は、後者の「元宮」だったというような話もある！）、そして、その両者（神社）は、件の「老松（神社）」と大に関わる？、筑後の「三沼の君→筑紫の君？」が庇護（進出？）した神社であることも間違いなさそうなのでもある?!

しかも、その筑後には、他ならぬ「藤（藤）大臣」という人物もおおり（武内宿禰ではないかとも言われている？）、先の「陪従神」、「藤（とう）（氏？）」のことが、俄かに頭を過るわけである?!であれば、その「三沼の君→筑紫の君？」が、「大善寺玉垂宮」や「高良大社」の創建を担ったことは、これまた事実のようなのであり、かの「空白の4世紀」の重要な場所と見做される「北部九州」の実態（実体？）が、そこから、見えてくるかもしれないのである?!

※補遺 三沼の君→筑紫の君？は何者？物部氏のルーツ？宗像三女神を創出？
宮地嶽神社内の謎の「巨大円墳」！→円墳は「物部氏」あるいは「木（紀）氏」？
それと、「安曇族」の絡みは？→「三沼氏」の、「宗像」、そして「宇佐」への進出？そこに絡む百済系？の「藤／藤」？そこには、何があったのか？

⑨残念ながら、「宮地嶽神社」の謎は追えなかったが…?!

翻って、今回の旅の、もう一つの楽しみであった「宮地嶽神社」訪問であるが、残念ながら、その謎は追えなかった（ある意味当然ではあるが!）?!ただし、巨石（近くの相島から?運ばれた玄武岩）古墳（6世紀末建立?横穴式石室／大塚古墳／円墳→奥之宮三番社不動神社。日本一の大きさを誇る）を中から見る事が出来て、貴重な体験とはなった（なお、その古墳内では、かの「古代筑紫舞」が密かに舞われていたという!）!いずれにしても、よくぞこんなものを造ったものである!余談ではあるが、そうめん流し（無料）もいただくことが出来た!予想外の贈り物?であった?!

改めて、その古墳は、当時の北部九州の王（安曇族?）墓とされ、その金の出土品多数（国宝）から、地下の正倉院とも呼ばれているようである（金の鎧^{あぶみ}・冠・馬具類・大太刀等数多くの埋蔵物が発掘され、20点が国宝に指定）!有名な「光の道」は、当然現れなかったが、後背の山（在自山／宮地嶽）と社地、そして、階段と鳥居が織りなす光景は誠に秀逸であった!

しかも、その鳥居の神紋が、かの「三階松紋」（老松）であったことを後で知った（本当は、ここに迫りたかった?）!やはり、これは、筑後（第9代「開化天皇」あるいは「藤大臣」?）と関係がある!そして、そこには、改めて「安曇族」との関係もあるわけである?!

とは言え、これだけの収穫で終わるわけにもいかないのです、新たにネット上の情報を探してみると、何と、この「宮地嶽神社」、ここを総社として、福岡・佐賀・長崎に散在しているとのことで（17社。我が故郷唐津には2社も!※最新の情報では1社?何故?）、しかも、それらは、見ようによっては、例の筑後の高良大社と背振山系を、それぞれ取り囲むように配置されている?!

ますます興味が湧くのであるが、もちろんその詳細は分からない?何故、「宮地嶽神社」が、そのように配置されているのか?どこかに、その情報はないものか?だが、そこが、新たな謎（「空白の4世紀」の真相解明の道?）として、浮かび上がってきたことだけは確かである?!

※補遺「宮地嶽」は、「開化天皇」（木／紀氏?）と関係がある?!しかし、現在は、「神功皇后」と二人の「陪従神（藤氏?）」が祀られている!何故、そうになっているのか?→筑後の「三沼氏」の進出?!→「息長氏」との関係は?だが、そもそも「宮地嶽」とは何なのか（→宝満山の南側に「宮地岳」あり!）?そして、後世、何故、その円墳の内部で（隠れて?）「筑紫舞」が踊られていたのか?やはり、そこは、九州／筑紫王朝と関係があった?!財宝は、安曇族のものなのか?では、その九州／筑紫王朝?と安曇族の関係は?→謎は深まるばかりである?!ちなみに、「記紀」が、天皇家のルーツを（南部）九州にしたのには、相応の理由（根拠）がある!「日向（瓊瓊杵尊の降臨地）」を北部九州とする説もあるが、神話自体の整合性からすれば（史実のそれではないが!）、やはり南部九州と考えてよい?!もちろん、その素材は、そこにあった?!

⑩ 開化天皇、高良大神、武内宿禰、住吉大神、神功皇后の絡み？そこが解明されれば、一気に謎は解ける?!

話は、ここでもがらりと変わるが、いわゆる「大和朝廷（厳密には、8世紀初頭の持続・藤原政権）」が、記紀の編纂（ひょっとしたら『日本書紀』だけ?）を通して（「神話」の創作を含む）、自らの政権の正統性・正当性を言い募り（でっち上げ?）、都合の悪い（本当は真実であった!）過去の歴史を歪曲あるいは改竄して、かの（自分達に都合の良い?）「万世一系」の系譜を創り上げたということは、ほぼ間違いないということである（しかし、現時点では、このことさえも、まだまだ真実とは捉えられていない?!）!

そして、その中で、最も核心の部分となるのが、まさに現在追跡?中の、「開化天皇（玉垂命→老松?）、高良大神（高良大社→太宰府天満宮?）、武内宿禰（藤大臣?）、住吉大神（塩土老翁?）、そして、神功皇后（息長帯姫）の絡み?」なのではないかということである!

ただし、いずれにしても、その「絡み?」の解明で難しいのは、そこにあった「旧奴（那）国（倭奴国?）」の存続状況であり（例の「帥升王」や本来の奴（那）国王であった?「大幡主（大若子命／武埴安彦?）」の存在→多分そこに、かの「卑弥呼」「邪馬台国」の出現が関係している?）、その後の「壺（台）与」（「神功皇后」に仮構されている?）勢力の移動、変質の過程であることは言うまでもない?!

端的に、かの2世紀末の「倭国大乱」が、どのような勢力によって、どのように引き起こされたのかということであるが（そこから我が国の形／倭国→日本が作り出されてきた?!）、このコーナーで話題としているのは、そこでの「開化天皇」（玉垂命→老松?）、そして、「武内宿禰」（九州中南部から北上してきた「熊襲」勢力→姫／紀氏?）らが、それらと、どのように関わっているのかということである?!そしてまた、その攻防・交わりの地が、高良大社と背振山系周辺であったということである?!

※補遺 「藤大臣」は、実際は誰か?武内宿禰か?百済宗家王族「藤」か?また、塩土老翁（住吉大神?）とは?→瀬戸内海を牛耳る海人族?やはり物部氏（→津守氏）?→「旧奴（那）国（倭奴国?）」の存続状況は?→「帥升王」や本来の奴（那）国王であった?「大幡主（大若子命／武埴安彦?）」とは?→多分そこに、かの「卑弥呼」「邪馬台国」の出現が関係している?!そして、その後の、「神功皇后」に仮構されている?「壺（台）与」勢力の移動、変質の過程は?→そこが解明されれば、古代史の謎は一気に氷解する?!ちなみに、「帥升王」は、「素戔鳴命」に投影されているかもしれない?→北部九州と出雲の関係（象徴?）?!さらには、「大幡主」（大若子命／武埴安彦?）は、奴（那）国王?であったが、「大乱」による状況の変化で、近畿（大和や伊勢）に移動していた?!「武埴安彦の乱」は、その時の状況を示したものである?!いずれにしても、倭国大乱の原因、構図、そしてその結果を、改めて精査すべし!→これもまた、通説を大いに覆すものとなる?!

⑪ 「倭国大乱」に端を発する、我が国の形（倭国→日本）?!

ということで、ここからは、改めて、いわゆる北部九州（特に高良大社と背振山系周辺を中心とする地）で、どのような史実が展開されたのかということになるが、関わっている人物（多くは「神（命／姫）」として登場している?）としては、開化天皇（玉垂命→老松?）、武内宿禰（藤大臣?）、住吉大神（塩土老翁?）、神功皇后（息長帯姫）」ということである?!

もちろん、そこには、「中国史書（「魏志倭人伝」等）」中の「卑弥呼」や「台与」、そして「帥升」「難升米」「狗古智卑狗」等!さらには、「天照大神」「素戔鳴命」「大国主命」「大物主／オオナムチ」、そしてさらには「大幡主（奴国王?）」といったところであるが、彼らが、どういう勢力で、どのように出会い、その攻防を繰り広げたかであるわけである?!

そこで、まず、改めて問題となるのは、その交わり・攻防の大きなきっかけであった? 2世紀末の「倭国大乱」ということになるが、それはおそらく、それまでの盟主であった「倭（委）奴国」（博多湾沿岸地域）と、その隣国「伊都国」、そして、新たに登場してきた、内陸部の「邪馬台国」との、言わば三つ巴のせめぎ合いの経緯・形であるということになる（結局は、伊都国と邪馬台国が組んで、新たな連合国家を形成した?→その証拠が、かの「一大率」の伊都国常駐?）?!

詳しいことは、ここでは示せないが、その経緯の中で、旧「倭（委）奴国」の王族や、それとつながりのあった「伊都国」の、一部の?王族達が、その地を離れ（→「倭（委）奴国」における王の不在／「伊都国」における人口の減少?）、山陰、近畿、九州南部、さらには半島南部等にも移動し、それぞれが、新たな生活の場を創り出していった?!

そして、その中で、新たに大きな勢力を創り上げた「出雲」と「吉備」の勢力が、その邪馬台国連合（「新倭国?」）や中国、朝鮮半島からの脅威を回避するためもあって、先に移動していた「尾張」「丹波」の集団（海部族?）とも力を合わせ、畿内大和で別な（新たな）中心を形成していった（→纏向祭政都市／三輪政権）!

「記紀」は、そこをもって、我が国のスタートとしているわけでもある?!改めて、それは何故か?

※補遺 北部九州では、伊都国と邪馬台国が組んで、新たな連合国家を形成した（邪馬台国連合→親魏倭王／女王国）?!→その証拠が、かの「一大率」の伊都国常駐／旧覇権国「倭（委）奴国」における王の不在／一部の?王族の離反による「伊都国」における人口の減少?→その後、東（南も?）に移動した「海部族」（日下部族の一派か?）は、その移動経路や順番は不明であるが、大分県南部（豊後）、徳島県南東部（海部郡）、愛知県南部（海部郡）、そして北陸（丹後）等に、それぞれ新天地をもった?→一方、大和では、「前方後方墳勢力（?←和珥族）」と「前方後円墳勢力（?←物部族）」が、纏向祭政都市／三輪政権を樹立したが（周辺の古墳状況→柳本古墳群＋大和 おおやまと 古墳群がそれを示している?）、徐々に後者が優勢となり、その覇権が全国に広まっていった?!

⑫ 逆転の発想？が必要！「記紀」編纂の舞台裏？！

そこで、改めてであるが、記紀編纂側（当時の政権）は、そのような古代史の真相を知って（分かって）いた？！だから、彼らの、編纂（ここでは『日本書紀』）の目的意識は、如何にそれらを、自らに都合の良いものにするかであった？！つまり、ある意味「最初から」、そこには「用意されたストーリー（の骨格）」があった？！そういうことである？！

すなわち、書記編纂の基本原則（藤原氏／持統政権の正統・正当性の主張）が、そこにはあったということであるが、そこに、各地・各様の古文書や言い伝え等を材料として（重要氏族の家伝や、収集した「風土記」等を利用して！もちろん、そうしなければ、枝葉は描けない？！）、大きな建国物語を創り出したということである（「神話」の創作・架上は、その大きな武器となった？）？！

ただし、直接の『日本書紀』記述者（原案作成者？）は、自らの矜持（and/or 怨念？）でもって、どこかに、その真実（虚実？）を伝えようとした（例えば、わざと「あり得ない話」を挿入するとか？怪しげな「謎かけ」を行うとか？）？！また、一方の『古事記』は、それ以上に（これだけは、真実を伝えたい！だが、露骨な反逆は避けたい！）、誰か（おそらく「多（太）氏」？）が、別途密かに準備してのものでもあった？！

ということで、こうした史実解明の視点は、まさに「逆転の発想？」と言えるが、知れば知るほど（私の場合は、手に入る、一部の研究成果あるいは論者の知見からかもしれないが！ただし、それは、自分で言うのも烏滸がましいが、かなりの量であることは言うまでもない！）、そう思えてくるのでもある！

要は、そのように見れば、これまでの多くの矛盾や謎？が、不思議なくらい鮮明に見えてくるということであるが、特にここでは、この「記紀」が隠そうとした、いわゆる「倭国大乱」前後の状況、とりわけ北部九州の状況が、実際は、どのようになっていたのか？そこを明らかにしなければいけない！

そこに、「記紀」が暗示している、そして、編纂者達が、そこから繰り広げられてきたと認識している、つまり、そこがスタートであると考えられた、今現在（当時）の状況があるということである？！

※補遺 『日本書紀』編纂の目的は、史実を、如何に自らに都合の良いものにするかであった？！ということは、ある意味「最初から」、そこには「用意されたストーリー（の骨格）」があった？！それは、重要氏族の家伝・墓誌や、収集した「風土記」等を利用して！そして、それは、「神話」の創作・架上にとって大きな武器（素材）となった？！一方、『古事記』は、それと並行しながら、これだけは、真実を伝えたい！だが、露骨な反逆は避けたい！そういう思いで、書記編纂に関わった誰か（おそらく「多（太）氏」？）が、別途密かに準備してのものでもあった？！そう捉えると、記述内容の違いや扱われ方の違いがよく分かる？！その意味では、本当は、「記紀」と括ることは妥当ではないのかもしれない？！単なる、両者の記事のつまみ食い？は、よくないということでもある！

⑬ 似非「旅枕」？しかし、ここでは、是非書いておきたい?!

ある意味突然ではあるが、ここで、是非書いておきたいことがある！なかなか、本物の旅枕？をなすことが出来ないということもあるが、最近、ネット上の記事とか、YouTubeでの動画視聴ということで、私にとっては、ある種の旅枕？が、そこに実現している?!

言わば、似非「旅枕」？ということであるが、そこでは、これまで知らなかった（知る努力もしなかった?）、様々な情報、有益な視点が数多く得られているということである！本当に、凄い人達がいるものである（尤も、トンデモない人達も多々いるが?!）！

それはともかく、ここで、是非紹介したいのは、怪しげな？若者コンビ（サム&マサキ／漫才芸人風?）が提供している「TOLAND VLOG（トウランド・ヴィログ）」である！それは、「日本神話や世界の神話などの『謎』に注目して、分かりやすく解説するチャンネルで、登録者数は3月現在で14万人を超える人気チャンネルです。」とある！現在の登録者数は、私自身は知らないが、どの動画にも、（他の類似動画と比べて）圧倒的な視聴回数が刻まれている！

彼らは、事あるごとに、「エンタメ風」とは言っているが（もちろんその要素も多分にあるが!）、私には、遥かにそれを越えて、我が国の「謎多き古代史」への確かな解明材料、視点を提供してくれているように思えるのである（かの「古史古伝」等も含めて!）?!古代史研究家とは、一言も名乗っていないが（むしろ実業家?）、こんな若者（厳密にはサム）がいるのである！何と言うことか?!

脅威としか言いようがないが、個人的には、これから、かの九州王朝説と近畿王朝説との、言わば果てしないバトル?にも参入して、その新展開（真実解明?）を導いてくれるならば、これほど頼もしいことはない（その素地は、既に有している?）?!

他にも、何人かは、紹介したい人（ブログ）もいるが、今回は、以上！
※補遺 ネット上のブログやユーチューブサイトには、日本神話や世界の神話を含めた、いわゆる「古代史」の『謎』に着目して、分かりやすく解説しているものが多くある。ただし、それらの多くは、分かりやすくはあるが、その真偽については、かなり危ういものもあるようである？しかし、「謎多き我が国の古代史」への確かな解明材料（「古史古伝」等も含めて!）、視点を提供してくれているものもある！いずれにしても、折角のツール、ある意味容易い情報入手手段でもあるので、大いに頑張っ欲しい（チャンネル登録やいいね数に拘りなく？それは無理か?）！ただ、私の密かな願いは、彼らに、いわゆる「九州王朝説と近畿王朝説の果てしないバトル?」を克服する力となって欲しい。そう思って見ているのだが、まだまだ多くの動画は、それを指向していない？否、かなり独善、あるいは偏向ものも多い？それもまた、仕方がないのかもしれない！

⑭ 「倭国大乱」は、「準備されたストーリー」に絶対組み込まれている?!

先号でも述べたが、現在、ネット記事（ブログを含む）やYouTubeの動画で、これまで知らなかった、分からなかった情報（新知識？ただし、その真偽自体は、多くは保留！）に、それこそ多種多様に接している！そして、大いなる刺激を受けてもいる（特に、「神話」や、そこにおける「神々」の正体及びその関係等の解明？）！ある意味、見事なものである?!

そんな中、私自身の興味・関心（課題）は、「記紀」（とりわけ『日本書紀』）においては、ある意味「最初から」、そうした神話や神々の関係等には「準備されたストーリー（暗号）」があったということは、自分なりに推察してきているところであるが、問題は、その「準備されたストーリー」とは、果たしてどのようなものであったのかということになる?!

ただし、このコーナーでは、それとの関係で言えば、まずは、『魏志』等が記している、かの「倭国大乱（2世紀末）」が、そこに、どのように組み込まれているのかということが、重要な着目点となることは言うまでもない?!

何故なら、その「倭国大乱」の結果、少なくとも？北部九州では、それまでの、「倭奴（那）国」（後漢から印綬）を中心とする、言わば「旧倭国（連合）」から、「邪馬台国」（親魏倭王）を盟主とする、言わば「新倭国（連合）」が出現したということが、事実として考えられるからである！

ちなみに、その「倭国大乱」であるが、北部九州だけでのそれを指すのか、あるいは西日本全体（一部関東近辺までを含む？）を巻き込んでのものを指すのか、それについては、まだまだはっきりしない（ただ、『魏志』のそれは、その記述領域からすれば、北部九州でのそれを指していたと考えられる？）?!

しかし、いずれにしても、その「大乱」の後に、「卑弥呼」を共立した勢力（「新倭国（連合）」）が、「邪馬台国」を王都として、それまでの、倭奴（那）国を中心とする「旧倭国（連合）」から、その覇権？を奪取したということになるので、その前後の、諸勢力の攻防、それに伴う人々の移動・進出の経緯が、かの「準備されたストーリー」に組み込まれていることは、絶対に間違いない?!ということである?!

※補遺 神話や神々の関係等には、「準備されたストーリー（暗号）」があったと理解しているが、しかし、それは、ある意味「パッチワーク」ではあるので、その全体像や、そこに登場する神々（人物）の名前や系譜等を、判然と見分けることは難しい？また、「邪馬台国」（親魏倭王国）が、言わば「新倭国（連合）」か？あるいは、「倭国大乱」は、北部九州だけでのそれを指すのか、さらには西日本全体（一部関東近辺までを含む？）を巻き込んでのものを指すのか？等については、まだまだはっきりとしない（ただ、『魏志』のそれは、その記述領域からすれば、北部九州でのそれを指していたと考えられる？）。いずれにしても、倭国大乱前後の、諸勢力の攻防、それに伴う人々の移動・進出の経緯が、かの「準備されたストーリー」に組み込まれていることは絶対に間違いない！

⑮ 「倭国大乱」と、そこにおける「大幡主」の謎（怪？）?!

先号では、かの「倭国大乱」及びその前後の顛末？は、「記紀」（直接的には『日本書紀』）において、件の「準備されたストーリー」に、絶対に組み込まれているということを述べたが、ここら辺りの経緯や諸勢力の動きが、具体的にどうであったのかということが、改めて問われてくることは言うまでもない！そこに、どうにも訳の分からない人物（神）がいる！それが、「大幡主命」（初代奴国王？大若子命、武埴安彦命とも？）である！

ところで、実は、その神（命）を祀る神社（「櫛田神社」等！ただし、有名な博多の櫛田神社は、何故か？伊勢からの勧請という！）が、北部九州（現在の福岡県・佐賀県一帯）に数多くあるのであるが（しかし、祭神が入れ替えられたり、背後に隠されたりしている！）、かの2世紀末の「倭国大乱」によって、その命（神）を王としていた「倭（委）奴国」は衰退を余儀なくされ（政権移譲？）、彼ら（その王族？）は、近畿、そして、伊勢の方へ移動しているということらしいのである（事実、その伊勢には、櫛田神社や櫛田川というようなものがある！）?!

とは言え、そんな彼（神？）が、今日まで、その北部九州に、多種多様に？祀られているということになれば、この近辺の人達は、その「大幡主命」（大若子命／武埴安彦命）をこよなく敬愛しており、その時々権力者・支配者の目を掻い潜って、丁重に祀っているということにもなる?!なお、かの伊勢地方の豪族とされている「渡会氏」（伊勢神宮外宮の宮司）は、本来は「磯部氏」とされ、驚くなかれ、かの「伊都国」の出身ともされているようである?!

また、例の「丹生氏」（丹の発掘・精製氏族）も、その伊都国の出身と自称しているようであり（→和歌山県伊都郡、「丹生津姫神社」等）、北部九州からの移動（移民？）の事実、決して見逃せないものとなっている?!

まだまだその子細については、よく整理出来ないが、そのような史実が、ここで取り上げている「倭国大乱」と、どのような関係となるのか？その中でも、「大幡主命（大若子命／武埴安彦命）」が、どのような動きをなしたか？その辺りを、今後調べていきたいと思っている次第である！

※補遺 どうにも訳の分からない人物（神）！それが、「大幡主命」（初代奴国王？大若子命、武埴安彦命とも）！だが、北部九州の彼らが、近畿、そして、伊勢の方へ移動しているらしいのである（事実、伊勢には、所縁の櫛田神社や櫛田川というようなものがある！また、大和での「武埴安彦の乱」も記されている！）?!一方で、その伊勢地方の豪族とされている「渡会氏」（伊勢神宮外宮宮司）は、本来は「磯部氏」とされ、驚くなかれ、かの「伊都国」の出身ともされている？さらに、「丹生氏」（丹の発掘・精製氏族）も伊都国の出身と自称しているようであり、北部九州からの移動の事実（→和歌山県伊都郡、「丹生津姫神社」等）は、決して見逃せない！ちなみに、九州東部（豊前地方？）にも、「豊丹生ぶにゅう氏」がいる！これらを、いかに整合的に理解するかである！余談だが、博多の「櫛田神社」より、野芥の「櫛田神社」の方が、より真実を有している？

⑩ もう一つの謎（怪？）?! 欠史八代最後の、第9代「開化天皇」！

そして、もう一つの謎（怪？）は、件の、欠史八代最後の天皇である、第9代「開化天皇（稚日本根子彦大日日おおびび）」である！彼は、第8代「孝元天皇（大日本根子彦国牽くにくにくる）」の第二皇子で、母は皇后で、薨色雄命（穂積臣遠祖）の妹の「薨色謎命」。同母兄弟（姉妹）には、大彦命・少彦男心命・倭迹迹姫命、異母兄弟には、彦太忍信命・武埴安彦命がいるという！

すなわち、彼は、母系的には、後の？「物部氏」とつながり、そこから「阿倍氏」「吉備氏」、そして、異母兄弟としての「武内宿禰諸族（「蘇我氏」等）」「和珥氏」とつながっていてもいるわけである（あくまでも、その系譜が正しいということであればであるが？）?! しかも、その異母兄弟の「武埴安彦命」が、実は、件の「大幡主命（大若子命）」でもあるということになるわけである?! 何という複雑（怪しげ？）な人物（天皇）なのであろうか（改めて、「開化天皇」と「大幡主命」が異母兄弟であるとは!）?!

ちなみに、父の孝元天皇は、第7代孝霊天皇（大日本根子彦太瓊ふとに）の皇子で、母は皇后で、磯城県主（または十市県主）大目の娘の細媛くわしひめ命。同母兄弟はいないが、異母兄弟に、倭迹迹日百襲姫命・彦五十狭芹彦命（吉備津彦命）・稚武彦命らがいるという。しかも、彼は、「神八井耳命（神武の大和での長子とされる）」の後裔（母方）とあり、だとすれば「多氏」とつながり、さらに、異母兄弟としての「吉備氏」ともつながっているわけである?!

なお、和珥氏は、第5代孝昭天皇（觀松彦香殖稻かえしね）の皇子・天足彦国押人くにおしひと命の後裔。そして、第6代孝安天皇（日本足彦国押人尊）は、その孝昭天皇の第二皇子で、母は皇后で、尾張連の祖の瀛津世襲おきつよその妹の世襲足よそたらし媛。同母兄が、和珥臣の祖の天足彦国押人命ということになるわけである?!（※以上の系譜は、すべて「ウィキペディア」より）

何ともややこしいのであるが（漢字の読みも含めて!）、こうした系譜の中で、次の第10代「崇神天皇」が、どこからともなく（「記紀」からはそう判断される? ただし、最終的には吉備から?）大和に進出してくるのである?! であれば、この第9代「開化天皇」は、大和ではなく、北部九州にいたのかもしれない? そして、その痕跡（証拠?）は、例の「老松神社」に隠されている? そういうことにもなるわけである?!

※補遺 まず、「開化天皇」と「大幡主命」は異母兄弟である! であれば、第10代「崇神天皇」は、「大幡主命」の義理の甥っ子? だが、彼の出自は、「伽耶」とも目されている? とにかく、崇神は、どこから現れたのか? また、彼の祖父に当たる「孝元天皇」は、「神八井耳命（神武の大和での長子とされる）」の後裔（母方）とあり、だとすれば「多氏」とつながり、さらに、異母兄弟としての「吉備氏」（←「孝霊天皇」）ともつながっている? 史学界では、第2代綏靖から第9代開化まで、実在が疑われる「欠史八代」とされているようであるが、相当する人物あるいは勢力は、絶対にいるということでもある?!

⑪ 改めて、倭国大乱と「大幡主（大若子命/武埴安彦）」／「開化天皇」の関わりは?!

さて、改めて、こうしてみると、3世紀後半?に、「崇神天皇」を中心にして、近畿・大和に、新しい勢力・王権が出来ることになるわけであるが（三輪山麓の纏向祭政都市の出現→磯城地方の隆盛）、一方の北部九州には、その時期においても、倭国／邪馬台国連合はあった（残っていた!「台与」が女王を継いでいる!266年の「(西)晋」への遣使は、その倭国／邪馬台国連合のものであることは確か!)?!そして、その一世代前は、「卑弥呼」はもちろん、崇神の父親の「開化天皇」の時代ということにもなるわけである?!

であれば、それらの時代全体の史実解明の視点は、その前提としての、「(倭) 奴国」を中心としていた、まさに「(旧) 倭国」の解体（変質?それが、かの「倭国大乱」と呼ばれるものであった?）が、一方では、近畿・大和における新たな勢力の出来・結集、他方では、残された?北部九州の、その後の新たな展開を生んだということである?!おそらくそれらが、孝元→開化→崇神→垂仁→景行→成務、さらには仲哀・神功皇后・武内宿禰、そして応神→仁徳等に示される一連の状況であったということである?!

要は、それらは、連環的、したがって、同時進行的に進んでいたものということであるが、別言すれば、関わりのある同じ部族・勢力によって進められたのではないかということである?例えば、「和珥（鰐）族」、「鴨族」、「物部族（尾張氏や海部氏を含む）」とかである?!そしてそこに、神功皇后・武内宿禰（諸族）、さらには応神・仁徳等の新しい勢力（外来系か?）が入り込んできた?!そういう中で、北部九州は二つに割れ、その中の一方の部族・勢力が近畿・大和へ移動し（吉備と出雲を抱き込んで?）、他方では、新たな勢力の参入による「新倭国?」の誕生という形となったということである?!

ただし、その後者には、近畿・大和への集結に関わっていた一部の勢力が、再び?関わっているのではないか?!それが、神武の、大和での長子とされる「神八井耳命」の後裔である「多氏」である（彼らは、「火（肥）君」「阿蘇君」「大分君」等となっていった!）?!こうなると、そこには、新たな史実の解明が必要となってくる?!そして、その大きなリングが、「大幡主命」と「開化天皇」の関係だと睨んでいるのであるが…?!

※補遺 崇神天皇の一世代前は、父親の「開化天皇」はもちろん、「卑弥呼」の時代でもある?!「(旧) 倭国」の解体（変容?→「倭国大乱」?）が、一方では近畿・大和における新たな勢力の出来・結集、他方では、北部九州の、その後の新たな展開を生んだ（→邪馬台国連合）?!それらが、孝元→開化→崇神→垂仁→景行→成務、さらには仲哀・神功皇后・武内宿禰、そして応神→仁徳等に示される一連の状況を生み出したことになる?!要は、北部九州は二つに割れ、その中の一方が近畿・大和へ移動し（吉備と出雲を抱き込んで?）、他方では、新たな勢力の参入による「新倭国?」の誕生という形となったということである?!

⑩ 「大幡主命」が「旧倭国」、「開化天皇」が「新倭国」?!

そこで、ここでは大変な作業（妄想?）となるかもしれないが（だが真実?）、思い切って、かの「大幡主命」が「旧倭国」、「開化天皇」が「新倭国」の勢力というように捉えてみると、どのようになるのか?そこについて、少し考えてみたい!なお、前者は、博多湾沿岸（中心地は「須玖岡本」?）に覇を有していた「鰐族」、後者は、背振山系南麓→「高良大社周辺」に蟄集していた新興勢力（大伽耶・多羅勢力+狗奴国／熊襲族→神功皇后・息長氏+武内宿禰諸族）であった?!ただし、その後者の勢力については、もう少し複雑な様相があったとも思われる（→とりわけ、そこにおける「三沼君氏」の存在!）?!

とは言え、そこら辺りへの言及は、今後のさらなる課題ということで（大変な難題ではあるが!）、ここにおいては、取り敢えず、博多湾沿岸部の「旧倭国」の中心勢力（王族達）が、その内陸部、視点を変えれば有明海沿岸部の新興勢力に追いやられ（「鴨族」とともに東へ移動?!いずれも「海神族」?）、それが引き金（震源?）となって、西日本全体の諸部族・勢力の大々的な攻防、すなわち「倭国大乱」と呼ばれるものになっていった?!そして、その過程において、北部九州では、『魏志』に言う「邪馬台国」の出現、親魏倭王「卑弥呼」の登場、さらには「奄与（台与）」への継承がなされるわけであるが、その後の顛末（新倭国＝邪馬台国連合の解体?）については、ほとんど闇の中（5世紀末まで）という状況なのである!

要は、そのことについては、例の「記紀」は何も記していない!と言うよりは、かの「神話」として、その顛末を暗示させている?そういうことである?!いずれにしても、そういう中で、現在（も）、「大幡主（大若子命／武埴安彦）」、そして、「開化天皇（高良大神?）」を祀る神社や、彼らに纏わる伝承が、そこ北部九州に色濃くあるということは事実であり、ここではっきりとしていることは、ある時期から北部九州（倭国）が二つに分かれ、その二つの勢力が、北部九州と近畿（大和・河内）双方を舞台として、その後の「倭国→日本国」を形づくっていった?!少なくとも、そのことだけは言えるということである?!

補遺 繰り返しになるが、「大幡主命」が「旧倭国」、「開化天皇」が「新倭国」の勢力?→その「大幡主（大若子命／武埴安彦）」、そして、「開化天皇（高良大神?）」を祀る神社や、彼らに纏わる伝承が、そこ北部九州に色濃くあるということは事実であり、もしそうであれば、ある時期から北部九州（倭国）が二つに分かれ、その二つの勢力が、北部九州と近畿（大和・河内）双方を舞台として、その後の「倭国→日本国」を形づくっていったことは、ある意味はっきりとしている!少なくとも、そのことだけは言えるということである?!であれば、これも繰り返すようであるが、相変わらずの「あっちか?こっちか?論争」は止めにして、互いの有している知見を、そうした視点から出し合い、真の建国史究明に努力すべきである!マスコミもまた、そういうスタンスで対応すべきである!ロマンとか、自由闊達な論争（そうでもなさそうであるが?）とか、そういう囃し立て?は、この場合は無用である!否、むしろ害悪となる?!

⑨ 「倭国大乱」は、「鰐族」と「鴨族」の移動（逃亡？）から?!

では、改めて、その二つの勢力とは、具体的にはどのような勢力なのか？そこで、ここでは、かの「神武東征」のことを、少し冷静に？捉えてみたい！何故なら、それは、時代的には、先号でも述べたように、かの「倭国大乱」前後の話であるからであり、その動き（東征）は、それに伴う、ある勢力（おそらく「鰐族」と「鴨族」?!いずれも「海神族」!）の東への移動（逃亡?）を示すものと考えられるからである（ただし、物語自体は創作?）?!

すなわち、北部九州における自らの立場の悪化（覇権の危機?）によって、東に移動した「鰐族」と「鴨族」（奴国及び一部の伊都国の王族達も?）の主流は、まずは吉備に移動・逗留し、足守川流域に「吉備王国」を立てた（「楯築遺跡」／「龍神・竜王山信仰」→手焙形土器）。その後、彼らは、一方では「出雲」に進出し（意富郡へ）、他方では近畿「河内」へも進出し、「淀川」を遡り、「近江」で合流するとともに（→「伊勢遺跡」?）、もう一つの主流は、同じ「河内」から「大和川」を遡り、「大和」へと移動していった（→「纏向遺跡」）?!

前者が、後に「前方後方墳勢力」、後者が、「前方後円墳勢力」となっていくわけであるが、徐々に後者が優勢となり、前者の勢力は、北陸・東海、関東方面、そして、一方では、西に向かって、九州方面へと移動（回帰?）していった（それらが、後に「多氏」と呼ばれるものであるが、彼らは、神武の、大和での長子「神八井耳命」の後裔という位置づけであった!）!

ただし、ここでの問題は、西へ向かった（回帰?していった）「多氏」（の一部勢力）が、かの「新倭国（邪馬台国連合）」の樹立に、どのように関係していったかである?!最初の建国（「卑弥呼」の共立）に関係していたのか?それとも、卑弥呼の死後の「壺（台）与」の擁立に関係していったのか?そういうことであるが、そのどちらかに関わっていることは間違いない（おそらく後者か?←阿蘇の君、火の君、大分の君等）?!

ということで、それに関わるもう一つの問題は、中南部九州に盤踞していた「隼人／熊襲族」と、彼ら（「多氏」）が、どのように関わっていたかである?!これが分かれば、複雑怪奇な「背振山系周辺」と「高良大社周辺」の状況が、さらに理解できるようになる?!それについては、次号で。

※補遺 西へ向かった（回帰?していった）「多氏」（の一部勢力）が、かの「新倭国（邪馬台国連合）」に、どのように関係していったか?その最初の建国（「卑弥呼」の共立）に関係していたのか?それとも途中からか?はたまた、卑弥呼の死後の「壺（台）与」の擁立に関係していったのか?いずれにしても、それらのどれかに関わっていることは間違いない（おそらく途中か?←阿蘇の君、火の君、大分の君等の関与?）?!また、中南部九州に盤踞していた「隼人／熊襲族」と、彼ら（「多氏」）が、どのように関わっていたかも注目される?!こうしたことが分かれば、少なくとも、複雑怪奇な「背振山周辺」と「高良大社周辺」の状況が、より鮮明になるように思える?!そして、より大きな建国の謎が見えてくる?!

②⑩ 「大幡主命」と「開化天皇」は、「新旧倭国勢力」（「二極体制」）の生みの親?!

でも、何故か双方は隠されてもいる?!

ということで、ここでは、後漢から「倭（委）奴国王」とされていた「奴（那）国王」（達）が、何らかの事情で（最後は覇権の危機?）、2世紀後半から各地に移動し（それに伴う騒乱が、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれるもの?!）、その彼らの東への移動（→吉備→〈出雲／近江〉→大和）が、「神武東征」という物語に投影（拡大脚色?）されているのではないかということであるが、冷静に見れば、そこには、北部九州で、「奴（那）国王」（達）を追いやった「（新）倭国勢力」と、東へ移動（大和に集結）した「（旧）倭国勢力」の「二極体制」が出来上がったのではないかということでもある?!

ただし、もちろん、「記紀」は、大和に集結した「（旧）倭国勢力」の方から見た建国史を描いている?! そうしなければ、自らが創出した「万系一世」の物語が崩れる（史実がバレる?）?! ということである?!

であれば、ここでの「大幡主命」や「開化天皇」の話は、そうした、いわば「新旧倭国勢力」による「二極体制」に絡んだものとなるので、そのような視点での史実解明が求められるわけであるが、実は、そのこと自体が、「記紀」では隠されている、否、話が歪曲ないし捏造されている?!

すなわち、「大幡主命」は「（旧）倭国勢力」、「開化天皇」は「（新）倭国勢力」の代表（リーダー）ということであるが、両者は、共にその素性等が隠され（別な新たな勢力の出現→応神天皇 or 継体天皇を擁した勢力?）、その出身地（活躍の場所）である北部九州での痕跡が、ほとんど消されてしまっているということである（「大幡主／大若子命／武埴安彦」のことは、むしろ近畿にて多出している!）?!

だが、その名残（分かる人には分かる?）は、前者であれば「櫛田神社」、後者であれば「老松神社」というような形で（もちろん名称や祭神等の改変がなされている!）、今なお存続させられている! ということで、問題は、何故、そのようなことになっているのかであるが、裏を返せば、そこに真実を見つける材料が横たわっていることにもなるということである?!

※補遺 北部九州で、「奴（那）国王」（達）を追いやった「（新）倭国→邪馬台国連合勢力」と、東へ移動（大和に集結）した「（旧）倭国勢力」（「大幡主／大若子命／武埴安彦」のことは、むしろ近畿にて多出!）の「二極体制」の原形が出来上がったのではないかということであるが、もちろん、「記紀」は、大和に集結した「（旧）倭国勢力」の方から見た建国史である?! そうしなければ、自らが創出した「万系一世」の物語が崩れる（史実がバレる?）ということである?! だが、いずれにしても、「大幡主命」は「（旧）倭国勢力」、「開化天皇」は「（新）倭国勢力」の首長と考えられるが、両者は、共にその素性が隠され（別な勢力の出現のため→応神天皇 or 継体天皇を擁した勢力?）、その出身地（活躍の場所）である北部九州での事績が、ほとんど消されてしまっているということでもある! これが、最終的な、大和政権の、言わば「隠しておきたいこと」ということか?

② 「記紀」は、九州における「新旧倭国勢力」の実体を知らせたくなかった?!

さて、改めて、先号で述べたことは、北部九州の「新旧倭国勢力」（「大幡主」勢力と「開化天皇」勢力）が、その攻防によって、北部九州と近畿大和に、言わば「二極体制（構図）」を形づくったものの、何故か、「記紀」においては、それらの関係が隠され（捏造／脚色され?）、結局は、第10代の「崇神天皇」（「ハツクニシラススメラミコト」）の統治から、実質的な、「近畿大和における」、彼らの「万世一系の物語」が始まったように示されて（見せかけられて?）いるということである?!

なお、そこに至るまでの経緯は、いわゆる「神話」や初代「神武天皇」による「東征」物語、そして「欠史八代」とされる天皇（綏靖～開化）の御代に示されていることになるが（ただし、記される事績そのものは少ない!）、それら全体の史実解明は、まだまだこの先の話として、ここでの問題は、その出発点としての北部九州での真相を、新たに解明することである（もちろん私独りでは、到底それは不可能であるが!）!

言い換えれば、何故、北部九州の二つの新旧勢力が、共に隠されているのかである（形の上では北部九州の新勢力「開化天皇」から「崇神天皇」への引継ぎがなされているように見えるが!）?!

要は、建国史（『日本書紀』）の編纂者（直接的には藤原不比等）にとって、その双方は、あまり前面に出したくなかった（知られたくなかった?）勢力であったということであるが、端的に、「開化天皇」は、実は「紀（木←姫）氏」を中心とした勢力（「邪馬台国連合」の最後の王?）、「大幡主命」は、初期の「邪馬台国連合」によって滅ぼされた（移動を余儀なくされた）「（倭）奴国」の勢力（57年に金印を貰った（倭）奴国の最後の王?）と考えられる?!

しかも、後者は、先に近畿・大和に移動していた旧倭国勢力（おそらく「鰐族」と「鴨族」?）であったわけであるので、記紀編纂側は、彼らの覇権を奪ったことにもなるので、その存在は（少なくとも北部九州におけるそれは）、消された（隠された）ものと考えられないか?!

※補遺 北部九州の「新旧倭国勢力」（「大幡主」勢力と「開化天皇」勢力）が、北部九州と近畿大和の「二極体制（構図）」の原形をつくった?しかし、それらの関係（経緯）は隠され（捏造／脚色され?）、結局は、第10代の「崇神天皇」（「ハツクニシラススメラミコト」）の統治から、彼らの「万世一系の物語」が始まったように示された?!何故なら、「開化天皇」は、「紀（木←姫）氏」を中心とした勢力（「邪馬台国連合」の最後の王?）、「大幡主命」は、初期の「邪馬台国連合」によって滅ぼされた「（倭）奴国」の勢力?!しかも、後者は、先に近畿・大和に移動していた旧倭国勢力（おそらく「鰐族」と「鴨族」?）であったので、いずれにして、記紀編纂側は、彼らの覇権を奪った側にもなるので、それらの存在を消した（隠した）?!そういうことである?!

② ひょっとしたら、「神武東征」は（も？）「合わせ鏡」?!

ところで、ここで少し（否、実は大真面目に？）、かの「神武東征」のことを考え直してみたい！つまり、結局のところは、それは、北部九州（ある意味では九州全体？）から近畿へ移動した人々が、吉備を経由して（おそらく出雲を抱き込んで？）、奈良（大和）に新勢力を樹立したということである（北部九州に残っている勢力に対抗して？だから、それは、単なる東遷ではない！）?!そして、「記紀」は、その大移動を、「出雲の国譲り／大和の国譲り」という形で物語にしている?!しかも、それは、ある種の「合わせ鏡」のように?!

どういうことかと言うと、その「神武東征」以前に、「物部氏」の祖の「饒速日（にぎはやひ）命」一族（尾張氏や海部氏を含む）→ウマシマジノミコトが大和に先着していたという話（「記紀」より）は、彼らが、「出雲族」と組んで（ナガスネヒコ族との融合？）、最初の王権を形成していたことをも示しているということである（→三輪王朝）?!「神武」の大和での振る舞いは、それに対応するものであることは明らかである（出雲族との婚姻話等）！

であれば、その物語は、ある二つの勢力（集団）の東方移動のことを示しているのではないかということでもある?!すなわち、一つは、遠賀川流域からの、「物部氏」の祖の「饒速日命」一族のそれ、もう一つが、日向からの「神武」一行のそれである！もちろん、それは、別々の動きであったが（それは、おそらく「鰐族」と「鴨族」のことを指している？挿入された「日向三代」の物語には、そのことが投影させられている?）、「記紀」は、それらを、「神武」の東征話として、何故か？一本化させているということである?!

しかるに、その根拠（傍証?）は、「記紀」にある大きな違い、例えば、水先案内人と出会う場所（「速吸の門」と寄港地での滞在年数（とりわけ「吉備」）であるが、そこには、編纂者の思惑があり（単なる記憶の違いではない!）、それが、ある種の「合わせ鏡」となっているということである?!ちなみに、出会う場所は、「明石海峡」（『記』）と「豊予海峡」（『紀』）、「吉備」での滞在年数は、8年（『記』）と3年（『紀』）である！

※補遺 「神武」の東征話での、「明石海峡」（『記』）と「豊予海峡」（『紀』）、「吉備」での滞在年数の8年（『記』）と3年（『紀』）の違い→「鰐族」と「鴨族」の移動の反映？それが、「合わせ鏡」となっている?!／菟道彦（珍彦）→最初の「大和国造」（「やまと」の命名者?）→「瀬戸内海航路」の覇者?／宗像氏は、4世紀から6世紀まで天皇妃を輩出した和邇氏と同族（和邇坐赤坂比古神社は、宗像女神市杵島姫命も祀っている!）?そして、和邇氏の祖は、赤坂比古（『書紀』の日触使主ひふれのおみ?→卑弥呼の弟?日食に因むような名前?）?!→そこで、卑弥呼と和邇氏と宗像氏がつながれば、史実解明は一気に進む?!参考までに、応神天皇の皇太子・菟道稚郎子うじのわきのいらつこは、「播磨国風土記」では宇治天皇!母は、日触使主の娘・宮主宅みやぬしやか姫である!身分が低いという嘘はバレている!彼が、オオサザキ（仁徳）に皇位を譲るために自殺したという話も嘘?

②『古事記』の方は、「饒速日^{にぎはやひ}命」(物部族)のそれ？

先号では、ある意味大変な妄想？を記してみたが、しかし、そのことは、徐々に真実のものともなっているのではないかな？すなわち、両書(記紀)の違い、つまり、それは、単なる相補的な史書(正史)ではなく(対外的なものと対内的なものというような関係ではないということ！)、『古事記』は、おそらく太／多氏による(→多人長？)ものであり、彼らは微妙な立場で(政権の中枢から外されていた！)、正史『日本書紀』の記述(嘘？)の大枠は甘んじて認めるが、自氏にとって決して譲れないところは、それなりに(そこはかとなく？)暗示しているということである(それが、彼らにとっての矜持でもあった？！ただし、彼らの言い分が、すべて史実であったかどうかの保障もないが？)？！

いずれにしても、かの「神武東征」が、事実上は、北部九州からの「饒速日^{にぎはやひ}命」一族(物部族)の移動を投影させているということであるが(その意味では、かの「日向神話」や、そこから生じる「神武東征」の話は、ある意味では、『日本書紀』による虚構の産物なのかもしれない？ただし、その元ネタは大いにあった→「出雲族」の進出や「鴨族」の存在？)、そうであれば、そのもう一方の「中南部九州」の状況を、我々は改めて解明する必要がある！

実は、それが、かの「熊襲」、そして「隼人」との関係であり、おそらく彼らが絡んだ「北部九州」の実態(特に、背振山系や高良山周辺で繰り広げられた事実？)だということである？！

ただし、そこにおける「邪馬台国(連合)」と「狗奴国」、そして、「出雲」との関係が、実に複雑に関係しており、その実体と、その後の推移を明らかにすることは、現実には難しいということではある！間接的な「合わせ鏡」となるのが、「記紀」に示された「神話(神代)」と、いわゆる「欠史八代」の部分と思われるが、まだまだ感触の域であることは言うまでもない！

※補遺 『日本書紀』と『古事記』を、同じ「国史」と見てはいけない！→両書は、単なる相補的な史書(正史)ではない(対外的なものと対内的なものというような関係でもない！)？！そして、『古事記』は、おそらく太／多氏による(→多人長？)ものであり、彼らは微妙な立場で(政権の中枢から外されていた！)、正史『日本書紀』の記述(嘘？)の大枠は甘んじて認めるが、自氏にとって決して譲れないところは、それなりに主張しているということである(それが、彼らにとっての矜持でもあった？しかし、彼らの言い分が、すべて史実であったかどうかの保障もない？)？！そして、かの「神武東征」は、『古事記』では、北部九州からの「饒速日^{にぎはやひ}命」一族(物部族)の移動を投影させている？！そこを、重視したいからである？→いずれにしても、「記紀」では、「邪馬台国(連合)」と「狗奴国」、そして、そこと「出雲」との関係は、大いに伏せられている？それ故に、「欠史八代」の位置付けやそこに隠されている史実内容を、改めて精査しなければならない！→問題は、それが、吉備や出雲が関わってくる？「背振山系や高良山周辺で繰り広げられた事実」と、どう絡んでいるかでもある？！

②④ いよいよ次号からは、中南部九州との関係を探る?!

別記しているように、我（井上）が長女一家が、この度縁あって宮崎市内に転居する！一応、当地にある「宮崎神宮」や「生目神社（古墳群）」（の重要性？）は知ってはいるのであるが、折角そこを訪ねられる機会が出来たわけであるので、これからは、それらが関わる、懸案の？中南部九州への古代史旅枕（もちろん似非ではあるが？）を楽しむことにしたいということである！

例えば、「神武東征（神話?）」は当然であるが、それと関わる「日向（三代）神話」、そして、「西都原古墳群」等の真相（謎?）を、可能な限り追ってみたいということである！

要は、知れば知るほど、中南部九州の当時の状況が、北部九州のそれと密接に関連していることが分かり始め、いわゆる「熊襲（球磨曾於）族」や「隼人族」、そして、「紀（姫→木／紀／基…？）氏」ととの関係を、改めて解明する必要があるとの結論からである！すなわち、そこには、かの「大和建国」の実態、あるいはその後における北部九州との関係の解明（ここには、北部九州と近畿大和との二朝並立の本源がある？）が、改めて必要であるという認識があるということである！

まだまだ、その認識は、いわゆる「妄想」の域を超えていないようにも思えるが、「記紀」、とりわけ『日本書紀』が、その中南部九州との関係を、一方では強く示唆している（神話における「天孫降臨」や「日向三代」及び「神武東征」、さらには「景行天皇」や「ヤマトタケル」の「熊襲征討」の話等。しかも、かの「隼人族」は、天孫族の一つとして位置づけられている！）、しかし、他方では、卑弥呼時代（3世紀中葉）の「狗奴国」や、そこにおける「狗古智卑狗」等の実態（「魏志倭人伝」には明示！）等（極端に言えば、中南部九州！）については、ほとんど明示されていない?!これは、絶対におかしい（怪しい?）！

ということで、問題は、そうした中南部九州と北部九州との関係理解が、改めて求められるということであるが、その理解の鍵は、おそらく筑紫平野（両者の出会い／集散離合?）にあることは間違いない?!

※補遺 中南部九州と北部九州との関係理解の必要性→知れば知るほど、中南部九州の当時の状況が、北部九州のそれと密接に関連していることが分かり始め、いわゆる「熊襲（球磨曾於）族」や「隼人族」、そして、「紀（姫→木／紀／基…？）氏」ととの関係を、改めて解明する必要があるとの結論→「景行天皇」や「ヤマトタケル」の「熊襲征討」の話は虚構?→それは何故?→大和王権の正統性を仮構するため?→だから、卑弥呼時代（3世紀中葉）の「狗奴国」や、そこにおける「狗古智卑狗」「卑弥弓呼」等の実態（「魏志倭人伝」にはある!）等については、ほとんど明示されていない?!これは、絶対におかしい（怪しい?）!→「卑弥弓呼」「狗古智卑狗」の追跡の必要性→後者は、丹波経由で、近畿に進出したのか?→本当に、丹波（粟鹿^{あわが}神社等）へ進出したのか?この辺りが、今後追求されなければいけない部分であるが、今の時点では、そこまで手が回らない!しかし、ネット上のブログや動画では、その辺りの情報も、多少得られている?!

㊤ 古代日向国の実像を求めてーその１ー怪しげな「皇宮神社」?!

さて、この度、別記のように、宮崎を訪れた！僅か4泊5日の旅であったが、もう一つの旅の目的であった、「宮崎神宮」や「生目古墳群」にも行くことができ、新たな発見や気づきを得ることが出来た！なかでも、「宮崎神宮」の元宮とされる「皇宮こうぐう神社」の存在は、古代の日向勢力の移動の痕跡として、大いに注目される場所である（当然、それは、「神武東征（神話?）」や「日向（三代）神話」、そして、「西都原古墳群」等の真相（謎?）と関わっている?）?!ちなみに、それらの場所は、長女一家の新居から、予想以上に近く、今度また、ゆっくりと探索したいと思った！

ところで、かの「皇宮神社」についてであるが、「宮崎の宮」の跡と顕彰されているところで、現在の宮崎神宮の西北 600m の小高い丘に鎮座。祭神は、神日本磐余彦尊（神武天皇）。相殿神として、神武天皇の日向での后神で、東征には同行せずに、日南市油津にある「吾平津神社（乙姫神社）」に祀られている吾平津姫命。神武天皇とその吾平津姫命の間に生まれた手研耳命。神武天皇と大和の五十鈴媛命との間に生まれた神渟名川耳命（後の綏靖天皇）である。

伝承によると、15 才で皇太子に即かれた神武天皇は、生まれ育った同県西諸県郡高原町の「狭野神社」（旧宮崎神宮別宮）の地から、その皇宮屋こぐや（皇宮神社）に宮居みやいされたという。45 才の時に、宮崎を出発。その聖蹟の地として創建されたとされるが、創始は不詳。旧社殿は、明治 10 年に、宮崎神宮の摂社とされたらしい。

こうした伝承が、どの位の史実を伝えているのかは、もちろん私には分かり様もないが、はっきりしていることは、その宮崎からは、瀬戸内の土器等が色濃く出土しているということであり、かの神武東征において、豊予海峡（または備讃瀬戸?）で出会った海人族とは、彼らのことでなかったかということである?!

※補遺 宮崎平野（大淀川流域）の「宮崎神宮」や「生目古墳群」等の意味→その近辺にある「皇宮神社」の祭神は神日本磐余彦尊（神武天皇）。だから、その宮は、宮崎神宮の「元宮」！相殿神として、神武天皇の日向での后神で、東征には同行せずに、日南市油津にある「吾平津神社（乙姫神社）」に祀られている「吾平津姫命」。神武天皇とその吾平津姫命の間に生まれた「手研耳命」（他に弟妹がいたようであるが?）。彼だけが、東征に同行しているようだが、扱いがおかしい?→考えてみると、神武天皇と大和の五十鈴媛命との間に生まれた神渟名川耳命（後の綏靖天皇）が、2 代目皇位をついだことになっているが、その即位の経緯が、何とも不可思議?→他の部分の不可思議さも多々あるので、それは仕方がないが、この日向勢力の進出が史実?ならば（おそらくそうであろう!）、それを神話（ロマン?）だけに押しとどめてはいけない→当地には、多くの考古遺物もある！

②⑥ 古代日向国の実像を求めて－その２－「日下部氏」とは?!

ある意味ひょんなことから、古代日向国の実像を探ってみたいと思い始めた私であるが、考えてみたら、その暴挙?には、それなりの必然性があったようにも思われる?!

というのも、「記紀」に示されている「天孫降臨」や「日向三代」、そして、「神武東征」の物語はもちろんであるが（日向自体が、その物語の地!さらに、かの「八咫鳥」こと「タケツヌミ命」の出身もそこ?）、先号で述べた「宮崎神宮／皇宮神社」や「生目古墳群」、そして、それらの地に群在する「地下式横穴墓群」、さらには「西都原古墳群」等が、かの北部九州（とりわけ「高良山」周辺）と、近畿・大和周辺の状況の双方に、色濃く関わっているように思われるからである!

何とも奇妙で（つまり説明困難?）、その事実をどのように受け止めればよいのか?素人の私には、とても手に負えるものではないが、ただ、ここで今一つだけ突破できるのではないかと思い始めているのが、その地域の出身と目される「日下部氏（※多様な表記がある!）」の存在である（一説によると、「土の中から出現」したとも?）!

すなわち、同氏は、先の北部九州（とりわけ「高良山」周辺）と、近畿・大和周辺の双方に顔を見せているのである!例えば、前者では「高良大社」の「大祝」として、後者では「仁徳天皇」と日向出身の妃「髪長姫」の子「大草香皇子」といった具合である!ちなみに、その「髪長姫」の父親が、現在も同地に残っている「諸県もろかた」の名を負う「諸県君（牛諸井）」である!

もちろん、それらが、どの程度の真実かは分かり様もないが、この「日下部氏」（彼らは、「阿蘇氏」、そして、それに関わる、神武の大和での長子「神八井耳命」の後裔の「多氏」とも関係?）が、この奇妙な関係を説明してくれるのではないかということでもある?!また、それに関わっては、かの「景行天皇」の熊襲征討?話も、絶対に関わってくる（他ならぬ「諸県君（牛諸井）」は、彼の孫とも?）?!とにかく、改めてこれからである!

※補遺 「宮崎神宮／皇宮神社」や「生目古墳群」、そして、その周辺に群在する「地下式横穴墓群」、さらには「西都原古墳群」等が、かの北部九州（とりわけ「高良山」周辺）と、近畿・大和周辺の状況の双方に、色濃く関わっている?→まずは、阿蘇や高千穂に関わる「彦八井耳命」?もしかしたら、彼は、阿蘇・高千穂に伝わる「鬼八伝説」（神武の孫の健甕龍命によって討滅された地元豪族の話）の当人?それを、高千穂神社／草部吉見神社、そして阿蘇神社は知っている?!→その秘密を知っている?「日下部氏」（彼らは、「阿蘇氏」、そして、神武の大和での長子「神八井耳命」の後裔の「多氏」とも関係!）!彼らが、この奇妙な関係を説明してくれるのではないか?!→また、それに関わっては、かの「景行天皇」の熊襲征討?話も、絶対に絡まってくる（他ならぬ「諸県君（牛諸井）」は、彼の孫とも?）→さらに、「阿蘇氏」は、八代海沿岸部、高良山周辺部とも関わっている!→そこには、南方的要素が大いに加わっている（黥面文身／焼畑農業／鯨／犬祖伝説等）!

②⑦ 古代日向国の実像を求めて－その３－「南部九州」にも目を向けよ！

先に、日向出身の「日下部氏（族）」（熊襲族の一つ？）の存在について触れたが、思えば、そこには、ある意味途轍もなく大きな謎が横たわっているようにも思える？！と言うのも、地理的には、まるで違う方向のそれ（距離的にも！）であり、しかも、それぞれがまったく違った勢力（王権）であるならば、何故「日下部氏（族）」は、その北部九州と近畿大和の双方に顔を出すのか？

ただし、私自身は、そうした北部九州勢力と近畿大和勢力は、まったく違う出自の勢力とは考えておらず、その意味では、南部九州（日向）との関係には、それほど違和感はない？ただ、改めて複雑にはなるが？！

さて、それはともかく、よくよく考えてみれば、例えば、もし「日向三代」や「神武東征」の話が真実であれば、その地理的関係（矛盾？）は、速やかに解消する？！すなわち、「日向三代」の話が、北部九州と南部九州（日向）との、そして、「神武東征」の話が、南部九州（日向）と近畿大和との関係ということであれば、そこに関わっている南部九州（日向）の勢力（ここでは「日下部氏」？）が、いずれにも顔を出すことは、ある意味自然なこととなるということである？！

なお、北部九州と南部九州（日向）の関係として、北部九州にしか見られない「甕棺墓」が、南部九州（日向）の「阿多」にもあるという（であれば、それが、「瓊瓊杵尊」の降臨話となっている？）？！

とにかく、我々は、これまで、往々にして、北部九州か近畿大和かという視点で古代史の大枠を見てきたように思うが、他ならぬ南部九州（日向）との関係を加えた、言わば三すくみの史実存在に目を向ける必要が出てきたのである？！

とは言え、そこに、「吉備」や「出雲」（「近江」「丹波」「越」等を含む）、そして、中国史書にはほとんど見えない？、縄文・弥生から続く東日本の勢力との出会い、軋轢、共存の歴史が絡まっている？！だから、これからは、そうした視点の重要性を意識しながら、「記紀」を始めとする文献、それと連動させた考古史料の考察が求められるということである！

※補遺 何故「日下部氏（族）」は、北部九州と近畿大和の双方に顔を出すのか？

そして、その日下部氏の出自が、薩摩半島南端の「阿多」ともされるが（土の中から出て来たとも？→土蜘蛛？）、それと、「宗像族」（祖が吾田片隅^{あたかたす}命）は関係があるのか？そしてまた、それに、縄文・弥生から続く東日本の勢力との出会い、軋轢、共存の歴史が絡まっている？！だから、これからは、そうした視点の重要性を意識しながら、「記紀」を始めとする文献、それと連動させた考古史料の考察が求められる！／「記紀」が、天皇家のルーツを（南部）九州にしたのには、相応の理由（根拠）がある？吾田片隅命に即して言うなら、吾田（阿多）地域の片隅、端ということになるが、出水から市来にかけての地域は、阿多地域の北側になる？そこが、片隅（端）とも言える？→北部九州、ことに玄界灘沖ノ島ルートを管掌した海人「宗像氏」の原郷は、吾田の片隅、つまり、出水から市来にかけての地域だったのではないか？！→「隼人」との関係性！

②⑧ 古代日向国の実像を求めて－その４－「耳^{みみ}」と「投馬国」?!

ということで、ここでは、南部九州（日向）の実体？について、改めて迫りたいのであるが、もちろん、それに近づくための原材料を、私自身は持たない！ただ、以前から気になっていたのは、いわゆる「魏志倭人伝」に記されている「投馬国」のことである！読みや位置関係も、まだまだ定かではないが、その国が「トゥマ→ツマ？国」であれば、それこそ南部九州（日向）の中心地ということになる（現在の西都原古墳の近く。そこの「都万」には「妻神社」があり、かの「木花咲耶姫」が祀られている！）?!

また、その国の「長官」は「彌彌（弥弥／ミミ）」、「副官」は「彌彌那利（弥弥那利／ミミナリ）」（役職名？）と呼ばれていた。奴国の隣の不弥国から、南へ水行 20 日の位置で、5 万余戸の人家があったという。ちなみに、近くの日向市には、「美々津／耳川河口」という場所もある（しかも、そこには、「神武東征」に関わる伝承・行事があるという！）！

「ミミ」という名称に注目すれば、神武の、日向での長子「手研^{たぎし}耳」、近畿大和での長子「神八井耳」、次子「神淳名川耳（綏靖天皇）」、また、阿蘇や高千穂に伝わる「彦八井耳」等の名前を見れば、「ミミ／耳」が、南部九州（日向）に関わる名称であることが分かる?!ちなみに、丹後にいたとされる土蜘蛛の「陸耳御笠^{くがみのみかさ}」にも、何故か思いは馳せるところでもある?!

いずれにしても、「耳／ミミ」という名前が、南部九州（日向）とつながることだけは確かなようであり、古代日向国が、我が国の古代史（建国史）解明の大きな鍵を握っていることは間違いない?!ただし、問題は、改めて、かの「投馬国」が、ここで言う南部九州（日向）の地にあった国なのかどうかは、今のところ何とも言えないということである！

「邪馬台国連合」の強大な一国であったことは、その人口規模からも明確であるが、筑紫平野にあったと考えられる「邪馬台国」とは、一体どういう関係なのか？そして、そもそも、それらの位置関係に齟齬はないのか？そういうことが、新たな課題となるわけである！

※補遺「投馬国」！読みや位置関係も、まだまだ定かではないが、その国が「トゥマ→ツマ？国」であれば、それこそ南部九州（日向）の中心地（現在の西都原古墳の近く。そこの「都万」には「妻神社」があり、かの「木花咲耶姫」が祀られている?!←「大山祇」←日下部氏？）ということになる?!だが、やはり「魏志倭人伝」上の位置関係とは、かなりの齟齬がある？記載自体に間違いはないのか？「陳寿」による意図的な改変がないのか？その辺りも、再度解明が待たれる？→また、邪馬台国にしても、その都（女王の住む場所）が移動したことも考えられるので（→豊前？）、卑弥呼時代の周辺国（旁国）の名前や位置関係と、台与時代の周辺国（旁国）の名前や位置関係が変わっているということもあり得る？→ちなみに、ここでは直接関係ないが、「木花咲耶姫と磐長姫」の話は、何を言わんとしているのか？単なる、神（人間）の寿命の話ではないはず？

②⑨ 古代日向国の実像を求めて－その5－「熊襲（球磨曾於）」の北上?!

ところで、古代日向国は、今の宮崎県と鹿児島県（離島除く）を合わせた広大な地域であった！その後、8世紀になって、薩摩、大隅の両地が、それぞれ分国され、現在のような形になった（大宝2／702年に、隼人の反乱の端緒となった薩摩・多岐^{たね}の叛乱が起きたため、現在の鹿児島県の西部が分割され、唱更国（後の薩摩国）となり、和銅6／713年には、肝杯郡、贈於郡、大隅郡、始羅郡（現在の始良郡とは別）の4郡が分割され、大隅国となった）！

その後も、同地は、かなりの紆余曲折があったようであるが、ここでは、そこにおける「曾於（襲）国」（「南部九州」）に注目したい！何故なら、そこは、いわゆる「熊襲（球磨曾於）」の地（の一つ）とされているからである！「熊（球磨）」と「襲（曾於）」の関係は、今のところ（これからも？）はっきりしないが、先々号でも触れたように（日下部氏等のこと）、「日向」は、まさに我が国の建国史において、重要な役割を果たしたことは間違いない（だが、それ故に、「記紀」においては、彼らは、「熊襲（球磨曾於）」族という蔑称で疎まれ、その存在がはぐらかされてもいる?! 本当は、正統な種族だということ?）！

しかるに、その痕跡（証拠?）と思われるのが、いわゆる「（竪穴式）横穴墓」であり、「装飾古墳」の存在であるが、その発祥と広がり（経路）は、中南部九州から北上し、北部九州（主として遠賀川流域?）、そして本州、特に日本海側の方に拡散しているようである?!すなわち、それが、まさに「熊襲（球磨曾於）」族の移動（活躍?）を示すということなのである?!そして、それらは、北部九州（とりわけ筑豊地方?）や鳥取、そして、近畿（摂津や河内／今城塚古墳等→箱式石棺・阿蘇溶結凝灰岩の使用!）にまで及んでいる?!

ちなみに、近畿地方のそれは、通説の「継体天皇」に関わる地であり、しかも、彼自身は、近江または北陸（越前）の出身とされているので（彦主人王の子／応神天皇5世孫）、九州との関係がまったく分からない（かの「磐井の乱」には関わっているが?）!だから、彼は、謎多き人物（勢力）なのである!だが、その前に、北部九州での、神功皇后（息長氏）や武内宿禰等（住吉大神を含む）を処理しておかなければならない!

※補遺 熊襲族（日下部氏を含む?）は、北部九州、丹波にも、絶対に進出している?!北部九州（とりわけ筑豊地方?装飾古墳）や鳥取、そして近畿（摂津や河内／今城塚古墳等→箱式石棺・阿蘇溶結凝灰岩の使用!）にまで及んでいる?!だが、一方で、高良山周辺の筑紫倭国（→九州王朝）にも参画しているようであり、さらに、例の「倭の五王」とも関係している（→「松野連氏系図」）?!→だが、それも含めて、まずは、北部九州での、神功皇后（息長氏）や武内宿禰等（住吉大神を含む）との関係を精査してみる必要がある!そこでは、二人の?「継体天皇」（一方は、熊襲族の王?→豊国倭国王→九州年号創始者?）の正体を明らかにしなければならない!ある意味、そこが、古代史最大の謎となっているからである?!そして、もう一方は、通説の、越または近江からのそれである?!

③改めて、古代九州の全体像を探る－その１－「神功皇后」「武内宿禰」の謎?!

ということで、これからの、改めての課題は、北部九州での、神功皇后（息長足姫）や武内宿禰の謎（彼らは、近畿から動いてきたようになっている？）の解明である（もちろん仲哀天皇や住吉大神を含む！）！

例えば、別な情報によると、神功皇后（父親は息長宿禰王／開化天皇玄孫、母親は葛城高額姫／天日矛の子孫）は、背振山南麓に、その縁の痕跡があり（佐賀県旧脊振村には、彼女を祀る「野波神社」と、その父母を祀る「下宮神社」がある！）、武内宿禰（「孝元天皇」の孫・屋主忍男武雄心命（または、その父の彦太忍信命？）と、菟道彦（紀直遠祖）の女の影媛との子とされている）は、その父親？（「屋主忍男武雄心命」）が、佐賀県武雄市に所縁の人物となっている！そして、武内宿禰は、北部九州（筑後地方）では、「藤大臣」（高良玉垂命？）とも称され、一方でまた、南部九州では、何と「熊襲」の英雄？「弥五郎どん」ともされている?!

とにかく、その長寿の異常さも含めて（360余歳??）、まったくもって、謎（正体不明？）の人物と言わざるを得ないのであるが、彼はまた、「波多氏」「平群氏」「巨勢氏」「木（紀）氏」「蘇我氏」、そして「葛城氏」等、いわゆる「葛城諸族」の祖ということにもなっているのである！

通説によると、武内宿禰は、主君の神功皇后に常に寄り添って、その忠臣ぶりを果たしたということであるが（そのため、戦前には我が国の紙幣にも顔を出している！）、とてもじゃないが、このままでは、謎の人物（非実在？）ということでは終わってしまう（うやむやにされる？）！おまけに、墓所は、大和の「室宮山古墳」ともされるが、因幡（鳥取市）の「宇倍神社」とも言われる（伊福部氏の関わりか？同氏は、かつて筑後川流域にいた！）?!

いわゆる「職掌」、あるいは「複数の人物（モデル）」の重ねということもあろうが、個人としてではなく、その勢力、血統という視点でみれば（現代も、その末裔と称する人達がいる！本当かどうかは、知る由もないが？）、そこにある真実、そして、それが有している古代史解明の鍵が、おそらく（否、絶対に？）見つけられるかもしれない?!

※補遺 何故、「神功皇后」の母親葛城高額姫（天日矛の子孫）は、「葛城姓」なのか？佐賀県（旧脊振村）に、神功皇后を祀る「野波神社」と、その父母（息長宿禰王と高額姫）を祀る「下宮神社」がある！また、近くには、「桂木」という場所もある！この地域が、息長氏や大和葛城と、どのような関係になるのかは、まだまだ分からないが、双方に、何らかの縁（移動または行き来）があることは間違いはない?!要は、近江・北陸に移動した「息長氏」と大和葛城に移動した「葛城氏」（武内宿禰諸族と言ってもよい？）は、ある時一体化した？また、「熊襲」の英雄？「弥五郎どん」？かつて筑後川流域にいた「伊福（息吹）部氏」（武内宿禰と関係がある？）！→とにかく、こうしたことも、改めて究明される必要がある！なお、武内宿禰は、「孝元天皇」の孫・屋主忍男武雄心命（または、その父の彦太忍信命？）と、菟道彦（紀直遠祖）の女の影媛との子とされている！

③改めて、古代九州の全体像を探る－その２－北部と中南部の相剋の地・高良山?!

先号(③)では、北部九州での、神功皇后(息長足姫)や武内宿禰の謎の解明が必要であることを述べたが、それにしても、その課題は、とてつもなく大きく、しかも複雑怪奇である!しかし、そこに、一筋の光明がないわけではない!それが、実は、「古代九州の全体像を探る」ということである!

本「旅枕」は、期せずして(偶然にも?)、そのような軌跡を辿ることにもなっているわけであるが、要は、中南部九州の諸勢力と北部九州の諸勢力(新たに加わった半島経由の新渡来系の勢力も含めた?)の集散離合の歴史が、その後の我が国の古代史(建国史)を形づくったということである?!したがって、記紀神話に言う、瓊瓊杵尊の天孫降臨/阿多の勢力(隼人)との出会い、初代神武天皇の日向からの東征説話等は、全くの荒唐無稽とは言えなくなるのである?!

しかるに、「記紀」は、後世において(8世紀前後)、その時の為政者(権力者)達が(中心人物は、藤原不比等と持統天皇!)、自らの正統性・正当性を主張(確立)すべく、そして、都合の悪い史実は、神話等でうやむやにして、我が国の建国史を描いた(捏造・創作)ということであるが、ここでの文脈からすれば、それらは、彼らが依って立つ、近畿の「大和王権(朝廷)」から捉えた歴史(創作物語?)であったということでもある!

だから、その本家本元であった北部九州の実体/実態(九州倭国)、そして、おそらく、その実体/実態の一翼を担っていた(否、近畿倭国にあっては、そちらの要素が強かった?)中南部九州勢力(「狗奴国」等)の真相を隠した?!そして、彼らを、蛮族の「熊襲」(球磨曾於)として蔑視、あるいはその存在を闇に葬ってしまった?!だが、一方で、その中南部九州のことを、間接的に意識させようとした?!そのように思われるのである!

とにかく、その攻防の地(中心地)が、ある時期、筑後の高良山周辺であったことは間違いなく(その痕跡/象徴が、まさに「高良大社」!),そこを追及していくことが、目下の目標ということになる!

※補遺 中南部九州の諸勢力と北部九州の諸勢力(新たに加わった半島経由の新渡来系の勢力も含めた?)の集散離合の歴史が、その後の我が国の古代史(建国史)を形づくったということ!したがって、記紀神話に言う、瓊瓊杵尊の天孫降臨/阿多の勢力(隼人)との出会い、初代神武天皇の日向からの東征説話等は、全くの荒唐無稽とは言えなくなる?!だが、そうは言っても、「記紀」は、近畿の「大和王権(朝廷)」から捉えた歴史(創作物語?)であった!だからこそ、「古代九州の全体像を探る」ということが、改めて必要となるということである!その真相を知っているのが(逆に、隠しているのも?)、高良山周辺、とりわけ「高良大社」ということでもある?!→とにかく、高良大社、及びその元宮と目される「大善寺玉垂宮」(→吉山旧記・天皇屋敷・鬼夜(火祭り)・霰(アリナレ川)には、飛んでもない歴史(幾重にも輻輳された?)が秘められている?!

③改めて、古代九州の全体像を探る－その３－謎の高良玉垂命？彼（女）は一体誰??

ということで、今（から？）は、しばらく、かの「高良大社」に関わる情報を整理していこうと思うが、まずは、その祭神（主祭神）についてである。ちなみに、高良大社は、福岡県久留米市の高良山にある神社で、式内社（名神大社）、筑後国一宮。旧社格は国幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。古くは高良玉垂命神社、高良玉垂宮などとも呼ばれたとある。

古代から筑紫の国魂と仰がれ、筑後一円はもとより、肥前にも有明海に近い地域を中心に篤い信仰圏が見られる。厄年の厄ばらい・厄除け開運・延命長寿、現代では交通安全のご利益でも名高い。また芸能の神としての信仰もあるという。

そして、高良大社自体が名神大社、筑後国一宮であるほか、本殿に合祀されている「豊比咩とよひめ神社」が名神大社、境外末社の「伊勢天照御祖神社」が式内小社、「味水御井神社」が筑後国総社であるとされる。社殿は国の重要文化財に指定されており、神社建築としては九州最大級の大きさである。

さて、問題の祭神であるが、正殿：高良玉垂命（神紋は「横木瓜」、神使は「鳥」）、左殿：八幡大神（神紋は「右三巴」、神使は「鳩」）、右殿：住吉大神（神紋は「五七桐」、神使は「鶴」）。この他、本殿内には御客座があり、豊比咩大神が合祀されている。高良玉垂命とは、夫婦との説もある。神階は正四位下。また、御客座には、境内にあった「坂本神社」の祭神などが合祀されているとも。

とは言え、高良玉垂命は、朝廷から正一位を賜っているものの、記紀には登場しておらず、正体が誰であるかに関しては古くから論争があり、武内宿禰（→物部保連）説、藤大臣（→中臣鳥賊津臣命、藤大臣保連、月天子、住吉明神の化身、物部氏の遠祖・物部胆咋連、物部保連）説、物部祖神（饒速日命、物部胆咋連、物部保連）説、彦火々出見尊説、水沼君祖神説等、諸説があるらしい。

江戸時代には、武内宿禰に比定する説が主流であったが、明治以降は、特に比定されていないとも?!何とも、不思議な祭神なのである！私自身は、今のところ、「開化天皇」が怪しいと思っ**て**はいる?!

※補遺 「高良玉垂宮神秘書」（あまり信頼性がないとも言われているが？）→留意すべき「高良大社」の重層性／元宮「大善寺玉垂宮」との関係性→おそらく「物部勢力」の、大善寺方面（三沼／旧山門郡磯上）から久留米方面への移動？→物部（吉山／菅田？）保連（←「吉山／薬師寺旧記」）→玉垂命／姫（三沼氏・阿蘇氏／蒲池姫？）→高良玉垂命→神功皇后・武内宿禰（→？藤大臣）??だが、実は、「開化天皇」（木／紀氏？）が本命？→ただし、重層していて、よく分からない！ちなみに、高良大社の祭神を、一座（豊姫宮）：（中）道主貴（天照）、二座（玉垂宮）：（左）興止比咩命（ゆた姫）（中）止譽比咩命（豊姫）（右）息長足姫命（神功皇后）、三座（高良宮）：（左）八幡大神（正八幡大幡主）（中）高良大神（彦火々出見命）（右）住吉大神（開化天皇）とする説もあるようである！なお、この周辺は、いわゆる前方後円墳造営が、一番遅かったという説もある？

③改めて、古代九州の全体像を探る－その４－始まりは、ここ「大善寺玉垂宮」?!

しかるに、その高良大社の元宮という「大善寺玉垂宮」というものも、併せて視野に入れておく必要がある！何故なら、その元宮ということもさることながら、こちらの玉垂宮は、古来、筑後国三潴庄鎮守、高良御廟院大善寺玉垂宮と称し、盛時には衆徒 45 坊社領 3000 町を有した朝野の崇敬あつた古社で、祭神は、玉垂命（藤大臣とうのおとど・高良玉垂大菩薩とも）・八幡大神・住吉大神で、創建は古く、凡そ 1900 年前の創祀と伝えられるものである！

ちなみに、この宮は長い間、寺院と神社が一体的に祀られた典型的な神仏習合の神社であったが、明治 2 年（1869 年）の廃仏毀釈により、寺の方は廃され、玉垂宮のみが残り、現在に至っている。しかし、往時の大善寺の遺構である鐘楼をはじめ、阿弥陀堂（鬼堂）や旧庫裡が現存し、神仏習合時代の面影を色濃く残している。神宮寺の高法寺（弘仁 5 年／814 年、大善寺と改称）は、天武天皇期の白鳳元年（672 年）法相宗の僧、安泰和尚によって開基されたとある（また、そこは、「天皇屋敷」とも呼ばれていたという）。

ただし、いずれにしても、こちらの宮の創建についても、景行天皇の皇子「国乳別くにちわけ皇子」を始祖とする「水沼君（氏）」が当地を治め、その祖神を祀ったのが、その前身と考えられているが、前述の三神のうち、藤大臣（玉垂命？）は、神功皇后の三韓出兵に大功があり、『吉山旧記』（往時の社家の記録）によれば、藤大臣は、仁徳天皇 55 年に賊徒退治の勅命を受け、この地に下り、筑紫を平定したということである。

そして、同 57 年（369 年）高村（大善寺の古名）に御宮を造営し、筑紫の政事を行ったが、仁徳天皇 78 年（390 年）にこの地に没し祀られ、高良玉垂宮と諡おくりなされたという。そこに、まさに「武内宿禰」の存在が絡まってくるのであり、そこには、かなりの謎が横たわっているのである！

※補遺 大善寺は、何故「天皇屋敷」と呼ばれたのか？→景行天皇の皇子「国乳別くにちわけ皇子」を始祖とする「水沼君（氏）」？本当にそうか？→改めて、高良玉垂宮と武内宿禰の関係は？／一方、「(日下部氏後裔の)「稲員いなみ家」は、「時々の権力者からも崇敬を得ていたことが、同家文書の内容からもうかがいとれるのだが、なによりも注目すべきは、同家が高良大社の重器『三種の神宝』の出納職であったことだ。天皇家のシンボルである三種の神宝を持つ家柄こそ、九州王朝の末裔にふさわしい。同時に高良大社が三種の神宝を持つ社格であることは重要だ。伊勢神宮や熱田神宮でさえ三種の神宝すべてを持っているとは聞いたことがない。しかも高良大社では三種の神宝を隠し持っているわけではない。御神幸祭ではその行列中に堂々と並んでいるのである。天皇家以外で三種の神宝をシンボルとして堂々と祭っている神社は他にない」というような報告もある（古賀達也：古田史学会報、1998 年 6 月 10 日 No. 26 高良玉垂命の末裔！）！

③改めて、古代九州の全体像を探る－その5－二つに分かれた、高良山周辺の勢力?!

となると、当地（高良山周辺）においては、まずは、景行天皇の皇子「国乳別皇子」を始祖とする「水沼君（氏）」がその地を治め（そこに先住していた？肥前水上／背振山南麓の「桜桃沈輪ゆすらちんりん」（人物名）＝熊襲？を討滅した？）、その後、そこに神功皇后や武内宿禰の勢力が流入し、高良山周辺を拠点にした、いわゆる「九州王朝」（の祖型？）が出現した?!そして、それが、その後の、いわゆる「倭の五王」時代を作っていくということである?!要は、その地は、少なくとも三つの勢力（熊襲？／三沼君氏／神功・武内宿禰勢力）の攻防（融合？）の地でもあったということである！

しかるに、ここが重要であるが、それらの勢力の攻防（融合？）の結果、近畿に移動する勢力（崇神／饒速日勢力→物部氏）とそこに居続けた勢力（開化天皇勢力？最終的には太宰府方面に移動した？）が、その後の「二つの倭国（一時期は三つか？＋豊国倭国？）」を形成し、九州（筑紫）倭国を母体にしながらも、広範な領域国家を実現させていったということである（なお、その祖型を変えたのが、かの6世紀初頭の「磐井の乱」であった？）?!

しかも、冷静に捉えれば、それらは、まさに「空白の4世紀」頃の話であり、ある意味では、そこでの推移（全体像）が、後世の我々にとっての「空白（の世紀）」となっているのである（もちろん、表面的には、中国史書に載っていないということであるが!）!

ということで、ここでは、改めて、その中心人物として描かれている？、かの「武内宿禰」の謎を追究していく必要があるわけであるが、その一番の謎（異常なまでの長寿はともかく）は、彼が、蘇我氏、葛城氏、紀氏等、いわゆる「葛城諸族の祖」とされていることであり、そしてまた、ある時期の政権中枢の場であった高良大社周辺において、北部九州勢力と中南部九州勢力（熊襲）の双方（ただし、それぞれの一部は、後の近畿勢力とも言える？）に関係していることである！

したがって、そこに登場している、藤大臣（武内宿禰?）、神功皇后、その夫とされる仲哀天皇、その子とされている応神天皇等の事績究明（史実解明）が、つとに待たれるのである！

※補遺 高良山周辺での攻防（融合？）の結果、近畿に移動する勢力（崇神／饒速日勢力→物部氏）とそこに居続けた勢力（開化天皇勢力？最終的には太宰府方面に移動した？）が、その後の「二つの倭国（一時期は三つか？＋豊国倭国？）」を形成し、九州（筑紫）倭国を母体にしながらも、広範な領域国家を実現させていった?→「空白の4世紀」頃の話?（なお、その祖型を変えたのが、かの6世紀初頭の「磐井の乱」であった?）→とまあ、このように構想させてもらっているが、まだまだ真相は藪の中?ただ、「空白の4世紀」、「謎の5世紀」（倭の五王時代）とされる倭国の中心地が、まずは高良山周辺であったことは、ほぼ間違いないであろう?!

③⑤改めて、古代九州の全体像を探る－その6－「祖禰」とは、武内宿禰らのこと?!

さて、前にも述べたかとも思うが、件の「武内宿禰」（藤大臣?）は、常に「神功皇后」に寄り添うように、筑後に現れたり、朝鮮半島に渡ったり、さらには、何故か、北陸や東北においても顔を見せている!ましてや終焉の地?が、山陰（鳥取）ともされている!まるで彼は、かの倭の五王の最後「武」が、宋への上表文（5世紀末）で述べている「祖禰（先祖達）」そのもののようである（年代的にも合う?異常な年齢も?）?!

で、もしそうであるならば、彼は、ある特定の人物ではなく、ある勢力の統合（和合?）人格として描かれているのかもしれない?あるいはまた、当該の何人かの人物、さらにはその勢力（→葛城諸族）を、総称して名付けたものなのかもしれない（前者は、そのためもあってか、現代でも、その〇〇世と名乗っている人がいる!）?!ちなみに、彼自身?は、景行／成務／仲哀／（神功皇后）／応神／仁徳の、6代の天皇（主君）に仕えたとされている!

とは言え、かの高良大社周辺では、邪馬台国の変容（解体?）に前後して（3世紀末から4世紀初頭?）、北・西からは背振山麓勢力（新羅・多羅・百済王族?）、南・東からは球磨曾於／多氏勢力が、それぞれ集散離合を重ねながら、まさに「倭の五王」の時代を迎えるということである（筑紫倭国を中心とした、新たな倭国→大倭国／倭国?）?!それが、実は、通説（俗説?）による「河内王朝」の事績と、どのように結びつくのかということであるが、ここでの史実がクリアされれば（本当のことが分かれば?）、謎だらけの古代史（建国史）解明も、一気に進むことになる?!

とにかく、そこでは、二つの倭国?が形成されていったこと、そして、それを、かの「武（王）」が、「祖禰（先祖達）」の国土拡大（統一?）としていたこと、ということが分かるのである?!だが、問題は、それらが、いつ、どのようになされていったのかである!それを、物語という形でデフォルメしたのが、かの「記紀」ということになるが、最終的な形が「持統・藤原体制」であったことは言うまでもない?!

※補遺 『宋書』にある「武（王）の祖禰」と「河内王朝」（九州倭国の分家・檐魯たんろ国家?）が、どのように結びつくのかということであるが、そこでの史実が明らかにされれば（本当のことが分かれば?）、謎だらけの古代史（建国史）解明も、さらに進む?!→そこでは、二つの倭国?が形成されていったこと、そして、それを、かの「武（王）」が、「祖禰（先祖達）」の国土拡大（統一?）としていたこと、ということである?／ちなみに、先にみた「高良玉垂命神」には、「九子（九躰皇子）」があったとされている。それが、（1）斯礼賀志命神、（2）朝日豊盛命神、（3）暮日豊盛命神、（4）瀧志命神、（5）谿上命神、（6）那男美命神、（7）坂本命神、（8）安子奇命神、（9）安楽応宝秘命神である!読み等、詳しくは分からないが、彼らが、全国各地に広がっていったのだろうか?余談だが、朝日豊盛命神と暮日豊盛命神は、宮地嶽神社と関係しているのかもしれない?

③⑥改めて、古代九州の全体像を探る－その7－701年までは続いていた「九州王朝」?!

要は、5世紀末までに（件の倭の五王時代に）、その版図が最大限に拡大し、その結果、東（分家・櫛魯^{たんろ}国家／河内）と西（本家／筑後）に、それぞれの拠点が置かれたということであるが、少なくとも、8世紀初頭までは、本家としての筑紫倭国（九州王朝）は、歴然と存在していたということであり（形式上は、701年の「大宝律令」制定までは存続していた！太宰府には、紫宸殿や朱雀大通りの遺称あり！）、その間の「白村江の戦い」（663年・百済復興戦）は、その九州王朝（本家）が主導したということである！

だが、その敗戦によって（しかも、679年の「筑紫大地震」も加わって？）、倭国九州王朝は、壊滅的な状況を迎えていた（→大和への集団移住→唐軍の駐留→傀儡政権の誕生?）?!件の天智天皇（中大兄皇子）は、その倭国九州王朝（→上宮王家）の類縁者ではあったが、正統（第一義的）な後継者ではなかった（だから、当初は「称制」であった?）?!おそらく、その正統（第一義的）な後継者は、例の蘇我氏（上宮王家）であったと思われるが、その宗家である「蝦夷／入鹿」を滅したので（乙巳の変）、天智天皇側（後の持統・藤原政権）は、二重の背徳（後ろめたさ）を背負って、自らの正統・正当性を必死に創り出そうとした（『日本書紀』は、そのための書でもあったのである!）?!

まあ、この辺については、通説とはかなり違った推測ではあるが（その意味では妄想と言われるかもしれないが?）、今後明らかにされていくものと思っている?!日本書紀が、最も隠したいこと、つまり、天武王統／蘇我・物部勢力（上宮王家）の存在と事績を、精緻に辿っていけば、自ずと分かっていく!しかし、そのことは、私個人では、到底無理であるので（時間的にも、能力的にも!）、この解明視点に同調される人が、一人でも多く出現されることを望む次第である!

ただし、私の努力／能力不足の故に、ひょっとしたら、もう既にそうした視点からの史実解明を行っている人（達）もいる?いつか出会えれば（ネット上で?）、嬉しいものである!

※補遺 筑紫倭国（九州王朝）は、歴然と存在していた（形式上は、701年の「大宝律令」制定まで!→太宰府には、紫宸殿や朱雀大通りの遺称あり!皇都の名残!）。

「白村江の戦い」（663年・百済復興戦）は、九州王朝（本家）が主導。だが、敗戦によって（679年の「筑紫大地震」も加わって?）、それは、壊滅的な状況を迎えていた（→大和への集団移住→唐軍の駐留→傀儡政権の誕生?）?!件の天智天皇（中大兄皇子）は、その倭国九州王朝（→上宮王家）の類縁者ではあったが、正統な後継者ではなかった（だから、当初は「称制」?）?!おそらく、その正統な後継者は、例の蘇我氏（物部氏から生まれた?上宮王家!）であった（→「蝦夷／入鹿」）。彼らを滅したので（乙巳の変）、天智天皇側（後の持統・藤原政権）は、二重の背徳（後ろめたさ）を背負って、自らの正統・正当性を必死に創り出そうとした（『日本書紀』はそのための書?）!

③⑦改めて、古代九州の全体像を探る－その８－本当の真実・事績とは？

ところで、改めて、問題の「高良山周辺の状況」であるが、その中心になっていたのが、4世紀半ば？突然出現した「貴（木／基肆）国」ではなかったか?!そして、その中核が、半島南部で出会っていた（和合していた?）「木（紀）氏」と「百済宗家佛流系王族（滕→藤?）」であったならば、事態は、よりスムーズに理解され得る?!

何故なら、「木（紀）氏」である熊襲系の「松野連系図」に、百済系王族と目される「滕（藤?）」の名があるからである（ちなみに、その「滕（藤?）」の次が、『宋書』に見える「讃」となっており、以下、「珍」「済」「興」「武」と続いているわけである→倭の五王!）!

もちろん、ここでは、その「松野連系図」の信憑性が問われるわけであるが、もしそれが真実であるとすれば、「木（紀）氏」と「百済宗家佛流系王族」との関係は、一応了解されるわけである!なお、その「滕（藤?）」は、かの「仁徳天皇」とされる倭王「讃」の父親であり、「応神天皇」とされた人物ともなる?!ただし、これはこれで、その照応が難しい!

いずれにしても、5世紀末まで（倭の五王時代）に、（九州）倭国は、その版図を拡大し、東（分家・檐魯国家?／河内）と西（本家／筑後）に、それぞれの拠点を置いたことは間違いない?!そう考えると、全体の説明がうまくいく?!

しかるに、少なくとも、8世紀初頭までは、本家としての筑紫倭国（九州王朝）は、歴然と存在していたということであり（宮都の各地への移動はあった?）、その存亡を大きく左右した、かの「白村江の戦い」は、その九州王朝（本家）が主導したということである?!

だが、その敗戦によって（しかも大地震も加わって?）、筑紫倭国（九州王朝）は、壊滅的な状況を迎えた?!そして、おそらく、それを機に、「大和への集団移住（←地名等の相似移動?）」がなされ（先遣隊は、多分上宮王家→蘇我氏?!）、他方では、太宰府にて、唐軍の駐留→傀儡政権の誕生があった?!もちろん、「記紀」は、その「東（大和）への集団移住」を為した側から描いた歴史書であるので、当然そういうことは記載していない（匂わせてはいるが!）?!

※補遺 問題の高良山周辺の状況であるが、はじめ、その中心になっていたのが、4世紀半ば？突然出現した「貴（木／基肆）国」?!そして、その中核が、半島南部で出会っていた（和合していた?）「木（紀）氏」と「百済宗家佛流系王族（滕→藤?）」であったならば（かなり大胆な仮説ではあるが?）、事態は、よりスムーズに理解され得る?!何故なら、「木（紀）氏」である熊襲系の「松野連系図」に、百済系王族と目される「滕（藤?）」の名があるからである!→大和への集団移住（←地名等の相似移動?先遣隊は、多分上宮王家→蘇我氏?!）。他方では、太宰府にて、唐軍の駐留→傀儡政権の誕生があった?「記紀」は、その「東（大和）への集団移住」を為した側から描いた歴史書であるので、当然そういうことは記載していない（匂わせてはいるが!）!

③⑧改めて、古代九州の全体像を探る－その9－鍵を握る「継体」と「磐井」の関係？

ということで、おそらく、かの武内宿禰、神功皇后、そして、仲哀天皇及び応神天皇の事績（物語）は、これまで述べてきたような事実を隠蔽するための、ほとんどが創作（捏造？）話であることは言うまでもない?!繰り返すように、「記紀」（事実上は『日本書紀』）を編纂した、当時の政権勢力（中心人物は藤原不比等！）が、自分達の政権の正統性・正当性を創出すべく、そのような人物群を配置したものだということである（ただし、そこに示されていることは、大枠は真実であった？その意味では、それに該当する人物・事績はあったのである？）?!

そこで、その大枠の真実（該当する人物・事績）がどうであったのか？ということであるが、ここでは、その大枠の真実の前にあった、3世紀末以降の邪馬台国連合の帰趨（台与王権の顛末？）にケリをつけておかなければならない！何故なら、その帰趨（顛末？）のプロセス（衰退あるいは滅亡？→近畿／丹波への移動？）が、ここで言う大枠の真実だったのではないかと考えられるからである（その意味では、邪馬台国東遷説は、この線上にある？）?!

ただし、それが、例の「神八井耳命」の後裔（前方後方墳勢力？）とされる「多氏」（筑紫君／阿蘇君／肥（火）君／大分君ら）の九州進出（出戻り？）に起因するものなのか？あるいは、『魏志』に示された「狗奴国（球磨曾於？）」との攻防によるものなのか？さらには、その双方なのか（「多氏」と「球磨曾於」は、微妙に絡んでもいる？）？そこが、今一つ定かではない?!そしてさらに、そこには、情勢の悪化から、半島南部から百済系勢力（本宗家→藤／藤？）が流入もしている（→「貴（木／基肆？）国」？その周辺に作られた神籠石群は彼らの主導による？）?!

だが、状況は、それだけではない！後の継体王権と筑紫君磐井（九州王朝）との確執（「磐井の乱」）に見られる、継体勢力の九州（筑紫）王朝からの分離・分立が、そこに出来しているのでもある?!ちなみに、7世紀初頭の「隋」との交流（「日出る処の天子／アマタラシヒコ）は、九州（筑紫）王朝のそれであったことは言うまでもない！

※補遺 邪馬台国連合の帰趨（台与王権の顛末？）のプロセス（衰退あるいは滅亡？→近畿／丹波への移動？）が、ここで言う大枠の真実だった（その意味では、邪馬台国東遷説は、この線上にある？）?!そして、後の継体王権と筑紫君磐井（九州王朝）との確執（「磐井の乱」）に見られる、継体勢力の九州（筑紫）王朝からの分離・分立が、そこに出来している?!→7世紀初頭の「隋」との交流（「日出る処の天子／アマタラシヒコ←上宮王家？）は、九州（筑紫）王朝のそれであったが、「記紀」は、それを、推古や聖徳太子の事績としている（『隋書』を見れば、それはあり得ないが！）?!「継体」の嫡子とされる「欽明」（ひょっとしたら「蘇我稻目？」）が、そもそもの謎？

㊿改めて、古代九州の全体像を探るーその 10ー継体王権は、精査が必要である！

そこで、改めて、その継体勢力の、九州（筑紫）王朝からの分離・分立というのは、具体的にはどういうことであったのか（記紀にいう「継体王朝」ではない？ので、その説明は、真に難しいのであるが！）？実は、それは、かの「九州年号」（←『二中歴』）から見出すことが出来る？！なお、九州年号とは、当時の倭国（九州（筑紫）王朝／倭の五王政権）が制定していた年号で、しかもそれは、列島全域で施行されていたものである（その証拠は、既に多く見つかっている！例の「武」の、宋への上表文と合致する？）！

それはともかく（でもないが！）、問題は、その創始の年号である「継体」である！その年号は（消されているものもあるようであるが？）、517 年から 521 年までのもので、以下、「…大化（695）（→大長→大宝）」と続いているものである！しかるに、同年号は、「武」の即位年の 478 年から 39 年目にして創始建元したとされるもので（その意味で、その政権は、そこで新たな王統を意識した？→「宋」を宗主国としないということか？）、その「継体」という元号名は、517 年から始まる「新政権？」が、誰かの政権を「継体」したということも示している？！

では、改めて、その 517 年から始まる「新政権？」を樹立したのは誰か？おそらく、それは、「武」の後継者？ではあるが、しかし、その正統な後継者ではない誰かということになる？！ここで思い出されるのが、527 年に起こったとされる「筑紫君磐井の乱」である！だが、それは、実際は 514 年であったそうである（この頃の書紀の記述は、13 年のズレがあるらしい？←「兼川晋」氏による！）？！もし、そうであれば、その乱の解釈は、通説を根本的に覆すものとなる？！すなわち、この乱は、筑紫君磐井（本当は本家九州王朝の王？）が、近畿の「継体天皇」の命によって、物部麁鹿火から滅ぼされたというものであるが、ここで言う「新政権？」を樹立したのは、他ならぬ、その物部麁鹿火ということになる？！

※補遺「九州年号」は、「武」の即位年の 478 年から、39 年目にして創始建元とあるらしい（→517 年。ちなみに、元号名は「継体」！）。その意味で、その建元を行った政権は、そこで新たな王統を意識した（継体した？）ということになる？そして、改めて、「宋」を宗主国としないということでもある？→ここで、まったく奇想天外な話となるが、かの「浦島伝説」が、その 478 年に挿入されているのである！そしてまた、その年は、これもまた、かの「豊受大神」（「羽衣伝説」の主人公？）が、伊勢外宮に遷座している年でもあるのである！これは、絶対に何かを暗示している？→そこで、まさに 517 年から始まる「新政権（王統）？」とは何か？→「豊国倭国」から立ち上がった「近畿倭国（日本国）」？それを始めたのが、通説に言う「継体天皇」、そして、それを創り上げた諸勢力（大伴金村／物部麁鹿火達？否、事実上は「息長氏」勢力？）？！→それは、「記紀」が描いている「雄略」（「武」とされているが！）から「継体」への移行期の話？であるが、どうも、そう単純には了解されない？したがって、例の「筑紫君磐井の乱」の真相（年代も含めて！）も、かなり怪しいものとなってくる（527→514 年？）？！

④改めて、古代九州の全体像を探る－その 11－「雄略天皇」や「継体天皇」との齟齬?!

そこで、もし、そういうことであれば、例のおかしな話も（近畿の？継体が、乱に勝利すれば、自分は長門以東（本州）を制し、鹿火には、筑紫以西（九州）を任せると言ったということ）、俄然真実味が出て来る?!そして、まがりにも、その政權（物部政權→上宮王家?）が、8世紀初頭まで、その九州年号を制定しているわけであるので、倭国王権（九州王朝）は、少なくともその時までには存続していたことになる（600年の「アマタラシヒコ」も、その王朝であった?!）！ただし、そこで齟齬が生じるのが、記紀が記す「雄略天皇」や「継体天皇」等の事績（否、存在そのもの?）である！

というのも、例えば「雄略天皇」は、即位（～逝去）年は456（～479頃?）年とされており、宋に遣使した「武」（478年に即位?）とは、ほとんど被っていない?それよりも何よりも、「武」は、ある意味始祖王?的な存在であるので、雄略ではない（「武」が雄略であることは定説とされているが?しかも、彼は、埼玉の稻荷山古墳及び熊本の江田船山古墳の鉄剣名にある「ワカタケル大王」ともされている?どうしたものか?）?!

また、「継体天皇」は、応神から（→仁徳、履中、反正、允恭、安康）、雄略（→清寧、顕宗、仁賢）、そして武烈へと続いた「応神王統」を、あたかも「継体」したかのように見せかけられているが（応神5世孫?ただし、その諡号は後から送られたもの!彼は、九州年号の「継体」という名前を被されたということか?）、そもそも近江または北陸から招かれて即位したとされるので、少なくとも九州王朝の王ではない?!ちなみに、「武烈」は、まさに二重の意味の「継体」のために捏造されているということでもある?!

いずれにしても、ここでの問題は、528（→515）年の乱?によって、3世紀末から創り上げられてきた倭国九州（筑紫）王朝（高良山周辺域）が変質（崩壊?）し、そこから二つの皇統に分かれたということである?!一つが、その倭国九州（筑紫）王朝を、文字通り「継体」した「（九州）物部王権?」、一つが、そこから近畿に移動した（すぐにではない?）「（記紀が描く）継体王権」ということになるが、その二つの勢力（王統?）は、共に「九州（筑紫）倭国←邪馬台国連合」のそれであったということである?!

※補遺「武」が雄略であることは定説とされているが、しかも、彼は、埼玉の稻荷山古墳及び熊本の江田船山古墳の鉄剣名にある「ワカタケル大王」ともされているが、本当にそうか?また、「筑紫君磐井の乱」において、倭国九州（筑紫）王朝を、文字通り「継体」した「（九州）物部王権?」と、そこから分かれて、近畿に移動した「（記紀が描く）継体王権」?この二つの勢力（王統?）は、共に「九州（筑紫）倭国←邪馬台国連合」のそれであった?!そのことも含めて、よくよく考えると、通説の「継体」の即位や大和への入京経緯には、かなりの不審さが見え見えである?!→やはり、「雄略」や「継体」の精査が必要なのである！

④改めて、古代九州の全体像を探るーその 12ー「筑紫君磐井」は、「武烈」とされた？

しかるに、後者（＜記紀が描く＞継体王権）は、おそらく、新羅系の「息長氏」や「秦氏」等が共闘して創出した「豊国倭国」（筑紫倭国の分国？後の「秦王国」？中心は田川地域？やがて宇佐を経由して、近畿に移動？）であろう?!そして、彼らの正当性（この場合は、これである！）の根拠を示したのが、かの「武烈天皇」の悪逆ぶりであろうということである（あまりにも悍^{おぞ}ましく、稚拙である?!→易姓革命！だから、当然それは捏造である？ただし、そこは、書紀のみの記述！古事記は、それ自体には同調していないということか？）?!

すなわち、彼（武烈天皇）は、「応神王統」の最後の王とされ、その継嗣がなかったために、応神5世孫の「（近江または北陸から招かれた）継体」が、「あたかも継体したかのように？」示されたのである?!だが、この皇統の承継物語は、明らかにおかしい！一つは、出身地（九州と近畿・北陸の二重存在？）、一つは、「継体」の中身（本当は九州（倭国）王統の継体？）ということである！もちろん、二人の継体がいるはずもなく、そうであれば、そこには隠された真実（トリック？）があることは間違いないのである！

そこでヒントとなるのが（その事績に被せられた虚実が、そこにはあるということである？）、かの武烈天皇の在位期間とその結末である?!しかも、かの「筑紫君磐井」が、倭の五王の最後の「武」の後裔であったとしたら、それは、かなり蓋然性の高いものとなる（例の「松野連系図」によると、「武」の次は「満」→「哲」（「賢」？←別系「稲員家系図」）と続いているが、「哲（or「賢」）が、その「磐井」と考えられている?!そして、その後は、一地方豪族に墮している？）！

ただし、それは、かの武烈の在位期間（496～506年）と合わない！だから、「磐井」は、「武烈」ではない?!であれば、そこには、さらなるからくり（嘘？）があることになる?!それが、記紀が示す（通説に言う）「継体天皇」との関係ということになる?!彼の在位期間は507～531年であるが、武烈の薨去年が506年とされているわけだから、当然そうなるが、問題は、かの「継体」年号であり、その創始年（515年）である！明らかにズレ（間）があるのである（だから、消されている？）！

※補遺 応神から継体への皇統の承継物語は、明らかにおかしい！繰り返すが、一つは、出身地（九州と近畿・北陸の二重存在？）、一つは、「継体」の中身（本当は九州（倭国）王統の継体？）ということ！もちろん、二人の継体がいるはずもなく、そうであれば、そこには隠された真実（トリック？）があることは間違いない！しかも、例の「九州年号」の創始年号「継体」が、ある史料には載っており、ある史料には載っていないらしい（明らかに消されている？）！ここでの根拠は、詳しくは紹介出来ないが、いわゆる「古田史学」を継承されている市民のみなさん（「古田史学の会」）が、地道に、その証拠（史料）を集められているということである！大変なご苦労もあるらしいが、その熱意と行動力には、純粋に打たれるものがある！ある意味、申し訳ないとも思う次第である！

④改めて、古代九州の全体像を探るーその 13ー九州倭国に送られていた百済の皇子！

では、その 507～531 年に在位していたとされる人物(記紀に言う「継体天皇」!)とは、実際は誰であったのか?そこでクローズアップされてくるのが、かの百済王族(仇台系牟氏)「昆支コンキノホムチ?」(牟昆/倭王「旨」?)」の弟「軍君コニキシノ男弟王」である?!彼は、同母兄の「昆支」と共に、九州倭国に「人質」として送られていた(兄が「筑紫倭国」、弟が「豊国倭国」へ?!)！

すなわち、それまでの倭国王権が、百済宗家佛流系余氏「藤(藤?)」に牛耳られ(→倭の五王政権)、その後、半島の百済王族「温祇系余氏」と「仇台系余(牟)氏」(熊津くまなり政権)が、その傘下に組み入れられ、その皇子達が、人質として倭国に送り込まれていたということである!その意味で、百済と倭国は一体化されていたということである(だから、倭の五王達は、「百済」への軍事統治権を執拗に主張したのでもある?そして、百済復興戦である「白村江の戦い」にも、無謀にも加わったのである?←兼川晋氏)?!

ところで、古代の大豪族であった「物部氏」であるが(尤も、その最初の出自ははっきりしない?単一氏族ではない?)、彼らが関わっている、かの有名な「七支刀」のことが、ここで思い出される!と言うのも、それは、百済王から倭王「旨」に送られたものであるからである(通説では 369 年とされているが、468 年のようである←これもまた兼川晋氏)?!現在、その刀は、奈良県の「石上神宮」にあるとされるが、不思議なことに、それと同じ刀?をもった武官の木像が、福岡県みやま市の「磯上物部神社(こうやの宮/高良こうらの宮?)」にあるのである!

ちなみに、倭王「旨」は、倭の五王の中には入っていないが(途中で、本国へ帰っている!）、一時期、筑紫倭国の大王となっていたようである!要は、彼は、百済からの「人質」として「筑紫倭国(筑後大善寺?)」に送られていた、仇台系王族の「昆支」と考えられる?!また、実弟の軍君/男弟王(「牟軍」!まさに、彼が「継体天皇」とされた?!)も、その分国としての「豊国倭国」に人質として送られていたということである?!

※補遺 ここで浮かび上がってくるのが、かの百済王族(仇台系牟氏)「昆支」(牟昆/倭王「旨」?)」と弟の「軍君/男弟王」であるが、彼らは、九州倭国に「人質」として送られていた(兄が「筑紫」、弟が「豊国」へ?)!ある意味、百済は、倭国に従属していたということである(だから、倭の五王達は、「百済」への軍事統治権を執拗に主張したのでもある?)?!その証拠が、かの有名な「白村江の戦い」(同胞あるいは主従関係であったからこそ、あれほどの参画となったのである?→それは、まさしく両国が、ある時期から、言わば「兄弟国」となっていたからである/倭国:本宗家「佛流系←仇台系」、百済:「温祇系」)?!なお、かの「七支刀」は、百済王から倭王「旨」に送られたものであるが(通説では 369 年とされているが、468 年の方がより信憑性があるとされる!）、福岡県みやま市の「磯上物部神社(こうやの宮/高良の宮)」にも、その縁の像があるという(←兼川晋氏)!

④改めて、古代九州の全体像を探る－その 14－筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋？

いやはや、またまた、とんでもない史実？にぶち当たってしまったようである?!
要は、3世紀末以降の邪馬台国連合後の倭国九州の実態は、神功皇后、武内宿禰、仲哀天皇、そして応神、仁徳と続く（に彩られた？）虚偽？の王統の時代、すなわち、「混乱」、そして「空白の150年（4世紀後半～5世紀）」、さらに、そこから生じた「倭の五王時代」、そして、その最後の「武」の後の「筑紫倭国」と「豊国倭国」の分離・分立、さらには、筑紫倭国の王統交代／豊国倭国の近畿移動と、本当に目まぐるしく変転している?!しかも、そこには、中南部九州の熊襲（球磨曾於）系勢力「紀／（姫／木／貴？）氏」「日下部氏」「久米氏」、さらには「多氏」、そして半島からの新羅・伽耶系勢力、その後の百済系王族の流入・渡来が絡んでいるのである?!

そんな中、まだまだ仮説、否、それ以前の状態かもしれないが、とにかく、6世紀前後に、新たな大きな枠組みが成立するということになるということである?!だから、さらなる問題は、そこにおける筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋の史実を、一方の近畿・大和の変遷を絡めて、いかに全体的に描くかということになる?!何故なら、真の建国史は、まさにそうした視点からしか描けないからである（「記紀」は、単なる九州王朝史のパクリではないということでもある!）!そこで、その解明の糸口になるのではないと思われるのが、「辛亥の変」（531年）というものである?!すなわち、それは、かの「継体天皇」の薨去記事（日本書紀）に関わっての、「日本の天皇及び太子・皇子、俱ともに崩薨かむさりましぬ」（「百済本紀」）というようなことである（それには、真偽についての怪しげな投げかけまでが行われている!）!

とすれば、そこで亡くなったのは、新生（分家の）「豊国倭国」の王族（「軍君／男弟王」と、その子「安閑」「宣化」?）だったのかもしれない?しかも、その太子・皇子を弑逆したのは、異母兄弟とされた「欽明天皇」だった（それが辛亥の変?）?そして、その「欽明天皇」（実は、蘇我稲目?）が、大和で「上宮王家→蘇我王権」を確立した?!まあ、そういうことでもあるが、とにかく、そこでは、かなりの政変があったことは間違いないということである（そう考えれば、前後の辻褄が合う?）?!

※補遺　かくして、6世紀前後に、新たな大きな枠組みが成立する。それは、筑紫倭国と豊国倭国が分離し、後者の豊国倭国が自主独立し、ある時期から近畿に移動したということであるが、問題は、その筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋の具体を、どのように描くかである?!例えば、それは、単なる二朝並立ではない!「欽明天皇」（実は、蘇我稲目?）が、大和で「上宮王家→蘇我王権」を確立した?→だから、一方の近畿・大和の変遷を絡めて、それらを、いかに全体的に解明するかである!ちなみに、「記紀」は、単なる九州王朝史のパクリではない!謎の「継体天皇」の薨去記事等は、それを如実に示している?!

④改めて、古代九州の全体像を探る－その15－「武烈」とは、誰のことか？

というのも、「記紀」に示されている継体王統は、それを「継体」したとする（5世孫→こんなことはあり得ない？）「応神王統」の後継王統である！そして、彼らは、その応神王統の最後の王、あの悪名高き「武烈天皇」の暴虐ぶりを示して、自らの正当性（辛うじての正統性？）を主張している（中華の国史にはよくあるパターン？易姓革命思想）？！

ということで、前号（④）では、さらなる大変な展開となってきたが、改めて、彼（継体／軍君／男弟王）は、かの第25代百済王「武寧王（斯摩）」の（義？）叔父であり、その彼（斯摩）から、有名な「隅田八幡人物画像鏡」（現在、和歌山県橋本市の「隅田八幡神社」に所蔵）を贈られているともされている？！この辺のことは、まだまだ詳しく解明されなくてはいけないのであるが、要は、「継体」という人物（天皇）は、かなりの謎（矛盾？）を秘めているということである！

しかるに、『二中歴（九州年号）』から推測される「武烈天皇」とは、本来の？「継体天皇」の別称でもあるとされているようであるが、以前の④との絡みで言うと、彼は、記紀に言う「継体天皇」と「物部麁鹿火」によって政権を篡奪？された「筑紫君磐井」ということはないか？もちろん、その場合、「武烈」は、正統な王統であった「磐井」の虚像であったということになる？！つまり、「磐井（武烈？）」は、貶められて当然の「暴君」であったということを主張（捏造）したいがためである？！

でも、「磐井」自体は、「武烈」ではなかった！何故なら、「磐井」は、『宋書』に見られる「武」の後裔（嫡子？）と見られるが（かの「松野連系図」には、共に名があり、磐井に相当する人物には、「哲」という名が与えられている！）、かの八女地域（岩戸山古墳等）に、別途安定した王権を営んでいた！問題は、いつ、どのように、その九州倭国が変貌していったのかである？！考えられるのは、徐々に、その勢力を増していった「豊国倭国」（筑紫倭国の分国、台与の類族達？／中心地は、田川／香春神社周辺？→「秦王国」？後に、京都郡や宇佐地方に移っていった？）の動きからということである？！

※補遺 問題は、いつ、どのように、その九州倭国が変貌していったのかであるが、注目されるのは、徐々に、その勢力を増していった「豊国倭国」（筑紫倭国の分国、台与の類族達？／中心地は、田川／香春神社周辺？→「秦王国」？後に、京都郡や宇佐地方に広がっていった？）の動き！取り敢えず、このように想定したのであるが、実は、田川・香春岳周辺は、かの高良山周辺と同じように、かなりの謎を秘めている！すなわち、そこは、宇佐神宮がある「宇佐嶋」、そして、「京都郡」がある、瀬戸内海沿岸の「豊前地方」、そうしたところと密接な関係を有している（おそらく「宗像」とも！）！「隋書」における「秦王国」がそこだと思われるが、遠賀川流域の「物部勢力」との関係も含めて、重要な地域である！ちなみに、そこは、いわゆる「秦氏」の、一大拠点でもあった（その一族の「辛島氏」も、注目される存在である！）！

④改めて、古代九州の全体像を探るーその16ー改めて、全体像を眺めてみると?!

翻って、その「豊国倭国」を支えていた「息長氏」や「秦氏」等は、一方で、近江・北陸等に本拠地を移し、琵琶湖・淀川水系を抑え、(豊国)倭国のレガシーを引き継ぎ(継体し)、「男大迹^{オホド}(彦太尊?)」を「継体天皇」にすり替え、その王権を確立したように見せた?!だから、彼らは、書紀の編纂(史実の捏造?)に積極的に関わった?!ちなみに、「息長氏」の姫巫女である「神功皇后(息長帯姫)」の英傑物語は、それを大いに盛り上げるための所業でもあった?!

ということで、我が国の古代史(建国史)は、まずは北部九州に確立された「倭国」が、西日本全体(影響としては関東にも及んでいる?)を舞台にした「倭国大乱」によって、二極分化していったことから始まる(初因は、「伊都国」と「邪馬台国」による「奴国」への攻撃?)?!すなわち、北部九州での覇権争いに敗れた「奴国」勢力の主流が、吉備や出雲に移動、そして、当地の勢力を抱き込んで近畿大和(纏向)に移動・集結し、新しい連合勢力を構築し(→纏向祭政都市)、他方では、その一部勢力(権力争いに敗れた多氏族?)が、新たに形作られていた邪馬台国連合に徐々に入り込み、北部九州(筑後地方)には、言わば「新倭国(筑紫倭国)」が形成された?!

そして、その後、その「新倭国」は、6世紀前後に、筑紫倭国(本家)と豊国倭国(分国)に分かれ、さらにその後、豊国倭国は、筑紫倭国(本家)と袂を分かち、移動して、「近畿倭国」として、旧来の勢力を糾合し、新た(別!)な倭国(日本国)を創り上げた?!それが、かの(「記紀」が示す!)「継体王朝」であり、その後の顛末ということである(基本的には、現皇統は、そこから始まっている?)?!その意味で、我が国の古代史(建国史)は、「筑紫倭国と豊国倭国」の並立と相剋という意味合いをもつということであるが、ただし、それは、あくまでも近畿倭国(倭国→新倭国→豊国倭国→日本国)からの説明軸であり、消された(隠された?)筑紫倭国(本家)の実相、そしてその、その後の推移については、ほとんどが知らされていないということなのでもある?!だから、問題なのでもある!

※補遺 その「豊国倭国」を支えていた「息長氏」や「秦氏」。彼らは、一方で、近江・北陸等に本拠地を移し、琵琶湖・淀川水系を抑え、(豊国)倭国のレガシーを引き継ぎ(継体し)、「男大迹^{オホド}(彦太尊?)」を「継体天皇」にすり替え、その王権を確立したように見せた。その新た(別!)な倭国(日本国)が、通説の「継体王朝」であり、その後の顛末である(基本的には、現皇統は、そこから始まっている?)?!その意味で、我が国の古代史(建国史)は、「筑紫倭国」と「豊国倭国」の並立と相剋という意味合いをもつのである!ただし、それは、あくまでも近畿倭国(倭国→新倭国→豊国倭国→日本国)からの説明軸であり、消された(隠された?)筑紫倭国(本家)の実相、そしてその、その後の推移については、我々にほとんどが知らされていない?!特に、それらに積極的に関わったと思われる「息長氏」や「秦氏」の存在は、あまり前面には登場してこない?!彼らが、書紀の編纂(史実の捏造?)に積極的に関わったからである?!

④⑥ここからは、九州での隠れた事績を追うーその1ー「日本貴国」はどうなるのか？

以上、繰り返すように、ここでは、「近畿大和か、九州か？」というような、単純な二者択一的な史実解明のスタンスは、その真の姿を見失ってしまうということであり、「記紀」が示す「高天原神話（「八岐大蛇退治」や「出雲の国譲り」等を含む）」「天孫降臨」「日向三代」、そして「神武東征」等（これらは、すべて九州、あるいはそこと関連しているものである？）も、そうした視点での解釈が求められるということである！しかも、神社伝承（神名等を含む）や地名の同一、類似性等は、まさに、「九州」と「近畿大和」との関係を如実に示している（ただし、そこに、「吉備」「出雲」「近江」「丹波」等が介在していることは言うまでもない）？！

ということで、先号(④⑤)では、かなり大きな結論じみたところまで述べたが（まだまだ解明のクリアさは今一つなのであるが！）、その基本的な枠組みは示すことができたのではないと思われる（あくまでも自己満足かもしれないが）？！そこで、ここからは、これまでの建国史論議ではあまり触れられていない？、ある意味では九州だけでの隠れた事績・動きを、可能な限り追ってみることにしたい！だが、それは、あくまでも倭国（→日本国）全体の歴史の解明の一環であって、一地域の局所的、限定的なそれ（いわゆる「地方史」）ではない（もちろん、そういう要素もあるにはあるであろうが？）！

そこで、まずは、『百済本紀』に見える（『日本書紀』に挿入されている！）「日本貴国」について考えてみたい！何故なら、その国は、先に述べた「筑紫倭国と豊国倭国」の並立と相剋の前段階のものと考えられるが、要は、神功皇后、武内宿禰、仲哀天皇、そして応神、仁徳天皇等が繰り広げたとされる、かの「空白の4世紀」の時代の表舞台になったところだったのではないかということからである？！

ちなみに、その貴国については、『日本書紀』神功皇后摂政46年（紀年では西暦246年→実際は366?年）、当時の百済王の使者が卓淳国（現在の韓国慶尚北道大邱市近辺か？）に至り、その「日本貴国」への道を尋ねたとの記事があるようである（「古代史俯瞰 by tokyoblog」）。

※補遺 改めて、ここでは、まず「日本貴国」のことを採り上げたが、記紀ではうやむやにされ、さらに、史学界でも、それ以上に無視されているようにも見えるが、本当は、とてつもなく大きな謎を有しているのではないかということによる！すなわち、その国は、「筑紫倭国と豊国倭国」の並立と相剋の前段階のものと考えられ、かの「神功皇后」「武内宿禰」、そして「仲哀天皇」「応神」、さらには「仁徳」等が繰り広げた、かの「空白の4世紀」の舞台であったということである？！ただし、その場所、そして、いつ、どのようにして現れたのか？また、その国の王は誰であったのか？→日本書紀?では、武内宿禰が、九州で王権を別に確立しようとしていたとあるが、実は、ここのことを指している？→本当は、百済本宗家「藤→兄王→応神のモデル??」であったのでは？

④⑦ここからは、九州での隠れた事績を追うーその2ー高良大社（高良山）と阿蘇の関係?!

しかるに、この「日本貴国」（中心は「基肆きい（木／紀）国」?）は、おそらく、かの「高良大社（「高良玉垂宮」）」の存在と大いに関わると思われるが（紀氏／開化天皇／老松神社／松野連氏との関わり?）、ある時期（邪馬台国連合衰退後?）、倭国の中心をなしていた（「記紀」は、大和政権の九州駐屯地のような扱いをしているが?）?!だから、百済や、他の南韓地域の国々が、その地（国）を確認しようとしていた?!そして、新たな関係を結ぼうとしていた?!

だが、その「高良大社」（貴国を含む）に関わって、一方で、どうにも気になるのが、「阿蘇」との関係である!と言うのも、その地域、つまり筑後の名族とされる「蒲池かまち氏」（最初の「柳川城主」）が、阿蘇と関係があるらしいのである!すなわち、「祖あら蒲池」と呼ばれる古族（阿蘇祖族）が、阿蘇の「蒲池比咩かまちひめ」（「阿蘇神社」の元宮?とされる「国造神社／北宮」の主祭神の一人→「阿蘇の母神」）を祖とすると伝わっており、その古族が「水沼氏族」と重なっているというのである?!さらに、その阿蘇の蒲池比咩は、かの「草部吉見氏族」が奉祭する女神でもあるのである!

そして、実は、こちらの方も（が?）興味深いのは、かの高良大社の「玉垂神」の名は、いわゆる「潮干珠（玉）、潮満珠（玉）」に纏わるもので、火（肥）国の伝承では、古くは、この蒲池比咩がそれを用いて、潮の満ち引きを司る「八代海の女神」とされていたらしいのである（なお、彼女自身を祀る神社が、宇土半島の付け根にある郡浦こうらの「蒲池比咩神社」!）!しかも、後代において、かの「水沼氏」は「日下部氏」を称すともあり、阿蘇の祖族である「草部吉見族」も、やはり日下部氏族なのである?!

要は、かの高良大社の神職には、その「玉垂神」の裔とされる「日下部（草壁→稲貝いながず）氏」があり、その地の高良山前衛部が「吉見の峰」と呼ばれ、高良に蒲池比咩の祭祀氏族、阿蘇の草部吉見族の存在が窺われるのである?!ただし、この氏族には多くの系譜があり、九州の古い氏族（日向、阿蘇、日田、高良など）は、そこでの祭祀氏族とされ、しかも、本来は中南部九州の狗人（球磨曾於／隼人）に由来するともされるのである?!

※補遺 問題の「日本貴国」!そこは、「基肆きい（木／紀）国」だったのではないか?だから、そこから、紀氏／開化天皇／老松神社／松野連氏との関わりが出て来る?→とは言え、そこから派生してきた?、その次の「高良大社」（貴国を含む）周辺の動きが気になってくる!すなわち、「阿蘇」との関係!→「祖あら蒲池」と呼ばれる古族（阿蘇祖族）は、阿蘇の「蒲池比咩かまちひめ」（「阿蘇神社」の元宮?とされる「国造神社／北宮」の主祭神の一人→「阿蘇の母神」）を祖とするとされるが、その古族が「水沼氏族」と重なっている?!さらに、その阿蘇の蒲池比咩は、かの「草部吉見氏族」が奉祭する女神でもある!→「多氏」が、日向・阿蘇・高良山方面へ!→「邪馬台国連合」の変質?→まだまだ謎は続く?

④ここからは、九州での隠れた事績を追うーその3ー隠された神？高良玉垂神の謎?!

ところで、『日本書紀』では、第12代「景行天皇」の妃である「襲の武媛」が生んだ「国乳別くにちわけ皇子」を水沼君の祖とするが、襲の武媛とは熊襲の女であり、その熊襲の女と、先の蒲池比咩が重なることはないか?!太古の蒲池比咩の記憶が「襲の武媛」として蘇ったものなのか?加えて、かの「大善寺玉垂宮」(「高良大社」の元宮)の大祝も「隈くま氏」である。

一方の「高良玉垂宮」の神職にも「神代くましゑ氏」という氏族がおり、隈(熊)とは狗人(熊襲)にまつわるもの?!そのため、例えば、「大善寺玉垂宮」の神事「鬼夜」は、壮大な火祭りとされるが、それは、阿蘇神社の「火振り神事」とともに、九州を代表する火の祭祀でもあるとされるのである?!

しかるに、その火の祭祀こそ、火(肥)の氏族の神事を彷彿とさせるのであるが、そこに隠されている「高良玉垂神」の謎とは、高良に持ちこまれた中南部九州の狗人・熊襲/日下部氏族(隼人族?)の神祇が、時代の為政者の手によって忌避されたということの結果なのかもしれない(「あらき獏ブログ」より)?

いずれにしても、かの高良山一帯では、古くから諸族の出会い、移動に伴う同化や統合が行われる中で、阿蘇の日下部氏族など、中南部九州の狗人(熊襲)の神祇が持ちこまれた様子も見られるわけである(ちなみに、815年の『新撰姓氏録』では、日下部氏族は「阿多御手犬養同祖、火闌降ほすせり命之後也」とあるらしい!阿多とは南九州、隼人の中枢である!)?!

ただし、阿蘇地方には、例の「多氏」が絡んでいることを忘れてはいけない!すなわち、「多氏」は、以前にも述べたように、神武の、大和での長子「神八井耳命」の後裔氏族とされるが、その子「健磐龍たけいわたつ命」が阿蘇に下向し、阿蘇神社主祭神となっているのである!

なお、その子の「速瓶玉はやみかたま命」(阿蘇国造大神)は、阿蘇神社では十一宮に奉斎されるとともに、後の蒲池比咩命(海神の女神?郡浦神社主祭神)こと「雨宮媛あまみやひめ命」と共に、「国造神社/北宮」の主祭神となっている。そして、彼らの子が、「高橋たかはし神」(第二子)であり、「火宮ひのみや神」(第三子。こちらは、例の高良大社の祭神または神祇職につながる神?)。ここに、「多氏」と「日下部氏」、そして「三沼氏(蒲池氏?)」が合わさってくるのである?!

※補遺 「多氏」と「日下部氏」、そして「三沼氏(蒲池氏?)」が合わさってくる?→多分?これらの真相は、「高良大社神秘書」に示されている(情報が錯綜しているようであるが、その複雑な真相が隠されている?)?!→例えば、高良大社の元宮である「大善寺玉垂宮」が、何故「天皇屋敷」と呼ばれたのか?高良大社の「祭神」の複層性(先に挙げた多数の神々!)が、何故、そうになっているのか等である?ただし、ここで確認しておきたいことは、もともとの神(高木神←英彦山の神ともされる?)が、後からきた神(神功達か?)に、その山を乗っ取られたという話が、別にあるということである(→例の「神籠石」を指す?)!

④ここからは、九州での隠れた事績を追うーその4ー改めて「多氏」はどう絡むのか？

ということで、改めて、「多氏」のことを追及する必要があるわけであるが、その前に、神八井耳命（多氏の祖）のことを整理しておく必要があるだろう！ただし、その神（氏族）は、真に厄介な神（氏族）である！と言うのも、その神（氏族）は、「東征」後の神武の、近畿大和での長子とされるが、その母親は、次子の「神沼河耳^{かむぬなかわみみ}命（第2代綏靖天皇）」と共に、出雲神「事代主神」と「三嶋溝楯耳^{みぞくいみみ}」の娘の「玉櫛媛」との間に生まれた「媛蹈鞰五十鈴媛^{ひめたたらいすずひめ}命」との間の子であるからである（なお、「東征」に同行した、日向？での先妻の子もいる！→多研耳^{たぎしみみ}命等）。

ここでは、そうした事情や、彼らの皇位継承の経緯については割愛するが、その神八井耳命（多氏の祖）の子とされる「健甕龍^{たけいわたつ}命」が、何故阿蘇に下向したのかである（ちなみに、彼らは、信州方面にも進出している！）。しかるに、神武東征以降？、人や文物の「西への移動」は確実にあったようである（その証拠の一つが、日田の「小迫辻原遺跡」で、そこには、当時の近畿や出雲の土器等が数多く搬入されているらしい！）。

だから、それが、この多氏の九州進出と関係があるのならば、そのことを、改めて考察してみる必要があるのである（吉備で発生し、近畿／近江で大同団結した「前方後方墳／手焙形土器勢力」の西への移動、否、回帰？）！その痕跡の一つが、例の「吉野ヶ里遺跡」に残されていることは、前にも述べた通りである！であれば、直接には「吉備」から出立した「多氏勢力」（淀川水系？）と「物部氏（饒速日）」勢力（大和川水系？こちらが、「前方後円墳」勢力？）が途中から袂を分かち、その主導権争いに負けた多氏勢力が、東西に散らばっていったと捉えれば、神話のストーリーとも合致する？！

だが、神八井耳命（多氏）にしろ、神沼河耳命（物部氏）にしろ、彼ら（の部族・勢力）は、神武（九州南部？勢力→鴨族？）と出雲（の一部勢力？→和邇族？）との婚姻（同盟）関係で生まれた御子とされているわけであり、彼らの部族・勢力が、最初の大和王権（三輪山麓）の中核であったことは、ほぼ間違いないであろう（→「大和・柳本古墳群」地域及び「葛城地域」？）？！

※補遺「神八井耳命（多氏）にしろ、神沼河耳命（物部氏？）にしろ、彼ら（の部族・勢力）は、神武（九州南部？勢力→鴨族？）と出雲（の一部勢力？→和邇族？）との婚姻（同盟）関係で生まれた御子とされているわけであり、彼らの部族・勢力が、最初の大和王権（三輪山麓）の中核であったことは、ほぼ間違いないであろう（→「大和・柳本古墳群」地域及び「葛城地域」？）」→いずれにしても、何故、このような動き・関係が作り出されたかであるが、逆に、これが、「倭国大乱」の様相を示すものともなる？→「北部九州」の覇権交代と敗者の「近畿・大和集結」？！それを、近畿大和側の視点から表すと、こういうことになるのかもしれない？→だが、そうであれば、何と壮大な人々の動きなのであろうか？

⑤ここからは、九州での隠れた事績を追うーその5ー鍵を握る「阿蘇」「健甕龍命」！

しかるに、先(④)の事代主神と三嶋溝楯耳(大山祇^{おおやまつみ}?)の関係は、まだよく整理がつかないが、前にも確認したように、前者は、大国主神(出雲神→大黒様)の子神(→恵比寿神)で、奈良葛城地方の地主神ともされるが、彼が、後者の娘の玉櫛媛と結ばれているということは(これが、かの日向三代の神話、とりわけ「ヒコホホデミ(山幸彦)」と「豊玉姫」の婚姻話に投影されている?!)、それは、前述の、吉備から近畿・大和に進出した前方後方墳勢力(河内・近江・山城回り→淀川水系)と前方後円墳勢力(河内・生駒回り→大和川水系)の関係を指しているのではないか(これは、葛城勢力と瀬戸内海勢力が、協力関係にあったことを意味する?!)??

だが、そのことは、ここではひとまず置いておくこととして、ここでの追究の矛先は、かの神八井耳命が、多^{おお}(大・太・意富等)氏の先祖とされ、一方でまた、阿蘇の君、肥(火)の君、大分の君、筑紫の君等の、多くの九州の豪族?達も、その後裔とされているということについてである。

すなわち、彼らは、もともと在地の豪族という可能性もあるが、近畿・大和から移動してきた部族・勢力の後裔だと捉えれば(ただし、もともとは?彼らの先祖は九州に居て、その後吉備・出雲?を経由して近畿・大和に移動していた?!)、ある時期から九州に移り住んだ(故地に戻った?)部族・勢力ということになる?!もし、そうであれば、何故、そして、いつ、どのように、彼らは、九州に移動した(戻った?)のか?!そうしたことが、問題(謎)となるわけである?!

そこで考えられるのが、今や定説ともなっている?、ある時期の、近畿から九州へ(東から西へ)の文物の移動の事実なのである!そしてまた、それが、3世紀前後、いわゆる「大和(纏向)」に集結した「前方後方墳(→?前方後円墳)勢力」(吉備から、おそらく出雲を抱き込んで?、河内・近江に進出してきた勢力=「手焙形土器」/火・日神信仰勢力)の一派が、その後、(逆に?)九州地方にも流れ込み、例の「吉野ヶ里勢力(環濠集落・銅鐸勢力)」等を滅ぼした(放逐した)ことが考えられるのである?!

そして、それが、いわゆる「倭国大乱」後の「邪馬台国連合」の出現(あるいは再編→「台与」政権?)と考えられるが、そのことを、実は、神八井耳命の子の「健甕龍命」(九州に向かった後裔達)の事績として、「記紀」は示しているのではないかということである?!

※補遺 繰り返すように、「多氏」の九州進出(出戻り?)の件は、「倭国大乱」後の「邪馬台国連合」の出現(あるいは再編→「台与」政権?)と関係していると思われるのであるが、「記紀」は、それを、神八井耳命の子の「健甕龍命」(九州に向かった後裔達)の事績としているのである(「阿蘇氏」「火(肥)君氏」「日下部氏」「三沼氏」等の絡み!「鬼八」伝説)?!→たとい暴走であるとして、これまで述べてきたことを無にしないためにも、今後とも頑張っていくしかない!